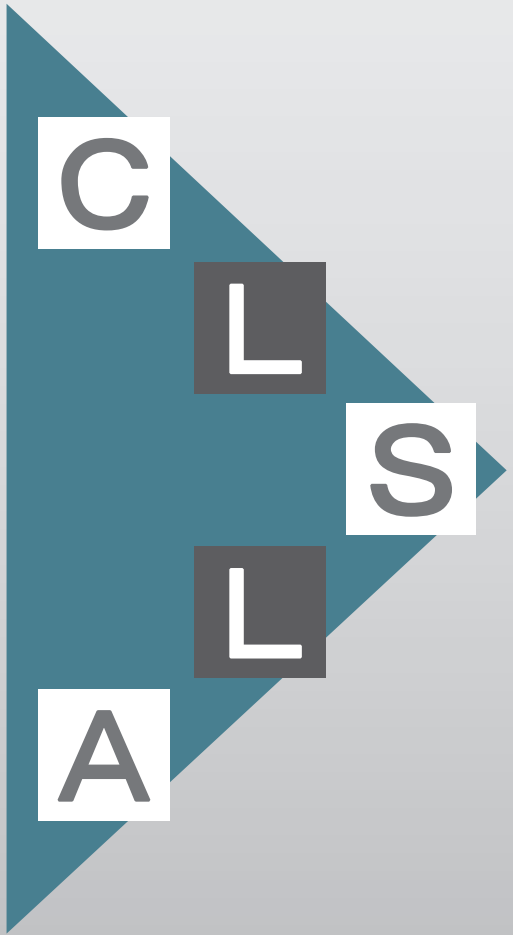
学習支援センター（SLAサポート）
年次活動報告書
2020年度

Annual Report 2020 / Center for Learning Support(SLA Support Office)



東北大学
高度教養教育・学生支援機構
Institute for Excellence in Higher Education,
Tohoku University

学習支援センター（SLA サポート）
年次活動報告書
2020年度

巻頭言

「わからなさ」の現代

―学習支援センターの意義―

学習支援センター長　芳賀 満

「草木国土悉皆成仏」の考えにのっとり有情の存在のみならず心をもたない草木なども悉（ことごと）く皆が成仏するのであるならば、コロナ・ウィルスも成仏するのではないか、と東北大学の佐藤弘夫先生（『月刊住職』2021.7, pp.112-117.）は述べる。私の個人的感情としてはウィルスなどは地獄に行って「くたばっちまえ、アーメン♫」（Sugar、「ウエディング・ベル」、1981 年）とは思う。

しかしそもそも、物事一般全てが我々の「制御下」（”under control”、安倍晋三首相東京オリンピック誘致演説、2013 年 9 月 7 日、ブエノス・アイレス）にあり、従って我々の意志と暦に従うべきだとするのが、最近の若い世代のヒトの傲慢不遜な考えである。最近とは我々のほぼ全員が生業としての狩猟採集を捨てて農業（特に種子繁殖）を開始した頃である。それは 600 万年前から始まったヒトの系統樹のうちでの 1 万年前であるから、ヒトの歴史全体の直近 0.16%ほどのことである。そもそもヒトは、利器である石器を作り出した 330 万年前頃からいよいよ勝手に自然界から独立して文明界を創造しはじめ、今やそこにのみ生きる反自然的な存在だ。自然という「神」あるいは創造者から進化の権能を取り上げ、未来の決定権は自己の手に握っていると自負している。そんなホモ・サピエンスだけが今や単独で地球表面を覆う。永らく同走していた他のホモ達は既に滅亡して久しい。

そのホモ・サピエンスの傲慢を、コロナ・ウィルスは自然界の代表として嗤いに来たのであろう。且つその敵であるウィルスが宿り進化するのが我々の肉体内であり、その敵の拡散は我々同一種のホモによる地球規模の国際的な文明のおかげである、という皮肉に我々は翻弄され続けている。

このような再びの「想定外」の大災害であるコロナ・ウィルス禍への現実的対応策を講じ、またコロナ後の人間の在り方を広く深く考えるのが現人類の喫緊の課題であるとき、そのためにこそ文

明界にあるのが大学であり、そこでの教育と研究が人類の今後を決める。この意味で大学こそ文明の象徴ではあり、たしかにそれは暦に支配され、時間割、シラバス、単位取得などの計画性に満ちた仕組みである。しかし一方で、文学部などにおけるように大学は「夏炉冬扇」を許すだけでなく、どこか野蛮で「想定外」をも包容するおもしろい場だ。まことに文明は贅沢にも「制御下」と「想定外」の両方を今後必要とする。(そのためにも大学はもっと野蛮であるべきだ。)

高校での勉強は効率的だが受動的であるとき、大学での学修・研究は効率は悪いかもしれないが主体的・自律的である。その上さらに大学は、文明的に「制御」されつつも、必ず「想定外」を奔放に夢想するべきである。それをコロナ禍から我々はあらためて学んだ。主体的・自律的な大学での学修・研究は、人間が主体的に勝手に自律と想定しているだけであり、実は自然によって覆され凌駕されることをも大いにあることを豊かに想像しなければならない。

そのようなコロナ禍とは「わからなさ」だ。コロナ・ウィルスの来歴も変異の行方も鵺のように正体がわからなく、したがって我々はほんの少し先の未来もわからない。このように世界がいろいろと転換してゆく中で、よく判らないながらも大学も必死で変革し、学習支援センターでの学修も変わってゆくしかない。そんなとき、そもそも大学で学ぶとは何であろう、特に東北大学で学ぶとは何であろうか。コロナ禍ゆえに大学で様々な活動がいまだに制限されているとき、SLA たちは東北大学の「先輩」として「共に考える」存在として、まさに「わからなさ」の共有により少しずつ未来を切り拓いて行ってくれている (括弧内の用語は SLA 活動に関わるキーワード)。それがひとつの答えではないだろうか。

大学は総力を挙げて万全に計画・準備・実行する。しかし一方で文明界の人知が及ばない領分が、学問対象と実世界には厳としてあることも想定し覚悟する。そのような東北大学での教育と研究を、専門分野は勿論、ライティング、語学、企画などの面からも支えようと学習支援センターと SLA たちは奮闘努力している。本書はその今年度の報告である。ご一読いただければ幸いである。

目次

巻頭言　「わからなさ」の現代―学習支援センターの意義―　センター長　芳賀満---------- 1

◆2020 年度事業内容・成果---------- 4

1.　センター概要　---------- 6

2.　センター活動・実績報告　---------- 10

3.　研修実績報告 ---------- 20
　　1）活動説明会　(21)
　　2）リフレクション会・活動報告会　(30)
　　3）SLA 共通研修「留学生が間違えやすい日本語と学習支援」　(36)
　　4）北海道大学との合同研修の実施 (38)

4.　部会活動報告　---------- 40
　　1）物理部会　(40)
　　2）数学部会　(46)
　　3）化学部会　(52)
　　4）ライティング部会　(56)
　　5）英語部会　(62)
　　6）日本語部会　(66)
　　7）企画部会　(72)

5.　SLA による活動振り返りレポート　---------- 82

6.　SLA 卒業プレゼンテーション　---------- 86

資料：2020 年度発行ポスター ---------- 92

編集後記 ---------- 94

◆2020年度事業内容・成果

1．スチューデント・ラーニング・アドバイザー（SLA）制度の運用を基盤とした学習支援の開発・実施

SLA Student Learning Adviser）とは，本学学生による学生のための学習支援スタッフである。学部生の授業時間外の教科学修や英語学習，留学生の日本語学習，及び学際的なテーマに関する協同学習実践への支援を行う。2020 年度の SLA 数は前期 36 名，後期は 41 名であった。うち当該年度中に新規採用した SLA は計 19 名である。

この SLA による学習支援は，①理系科目の学習支援，②ライティング支援，③英会話，④日本語会話学習支援，⑤学習イベント企画，⑥学習情報発信・広報活動という 6 つに大きく分けられる。2020 年度は，新型コロナウィルス感染拡大により従前のような対面での支援ができなくなった。そのため，Web 会議システムと G Suite for Education を活用した SLA サポート窓口支援の実装を図った。多くの相談がオンラインで実施された事や，それに付随して事前予約制となり，相談時間が固定化し予約枠数に制限が生じた点が，昨年度以前とは異なる。（ゆえに，昨年度以前の利用者数等との公正な比較ができなくなっている。）

2020 年度の全体の利用者数は延べ 1,467 名，1 活動日あたりの利用者数は 10.6 名であった。

①理系科目

急遽 4 月中に，理系科目支援のためのオンラインシステムを構築した。Google Meet や Jamboard を組み合わせ，利用者の問題状況や計算過程を共有しながら，オンラインでの学習支援が可能となった。BCP レベルが 2 以上であった前期と 1 月以降はオンラインのみ，10-12 月の期間はオンラインと M 棟での対面相談を併用した。2020 年度の利用者数は延べ 460 名，実数では 160 名であった。昨年度までの単純比較はできないが，利用件数では半減する結果となった。その理由としては，1）4 月の新入生オリエンテーションの中止やオンライン化により，1 年生への広報が十分に機能しなかった点，2）事前予約制やオンラインへの移行により，利用の心理的な敷居が高くなった点，3）理系科目の授業における内容・方法面の変化（オンライン授業により教員や TA に質問しやすくなった等）の影響等が考えられる。

②ライティング支援

年間を通してオンライン支援のみで活動した。ライティング支援の 2020 年度の窓口利用者は，延べ 89 名，実数で 34 名であった。留学生による日本語チェックを中心とした利用が多数を占めた。留学生利用者数は延べ 66 名だった。昨年度と比べると，国内学生（学部 1〜2 年生）の利用が大きく減少した。

また，例年実施してきたアカデミックスキルセミナー「レポート指南書入門ゼミ」（全 6 回）については，これまで対面のみで実施してきたため急なオンライン化に対応できず，実施を見送った。

③英会話（主に国内学生対象）

前年度までは「英会話カフェ」（ワークショップ）を中心に活動していたが，オンライン化により，「1on1」（個別対応）中心の形に移行させた。2020 年度の英会話支援の利用者数は延べ 435 名，実数 129 名だった。延べ数では概ね昨年度と同水準，実数では昨年度より 3 割超の増加となった。オンライン化により，高年次学生や大学院生（留学生含む）等，川内キャンパス以外に通う学生の利用が増加した。

④日本語会話（留学生対象）

日本語会話支援担当の SLA を増員（前期 4 名，後期 6 名）し，体制強化を図った。新型コロナウィルス感染拡大の影響によるオンライン化により，前年度までのカフェ形式（複数人の参加者で実施）から，1on1 形式に変更した。2020 年度の日本語支援の利用者数は延べ 289 名，実数 111 名だった。感染拡大防止措置により日本に入国できなていない留学生からの利用もあった。

⑤学習イベント企画

オンライン化により，例年ほどの多様なイベントの実施ができなかった。その一方で，哲学カフェ「かんがえるソファ」では，オンラインでの定期開催（年間で 23 回開催）により，例年よりも参加者数（申込数）が大きく増加した（延べ参加者数 173 名）。関連イベントとしては，学部 1 年生を対象として，4 月後半にオンライン

での新入生歓迎企画イベント「かんがえる Café」を計 6 回開催し，延べ 24 名の参加があった。

⑥学習情報の発信および広報活動

2021 年度の学部新入生に配布予定の『SLA SUPPORT GUIDE BOOK 2021』を作成した。この冊子では，学習支援センターの利用案内や，大学で学ぶ上で役立つヒント等を紹介している。新たに，留学生向けの『SLA SUPPORT GUIDE BOOK 2021 for international students』を，オンラインガイドブックとして作成した。

2．学習支援の組織開発および支援者育成システムの開発・実践

2020 年度は，例年は対面で実施してきた SLA 研修の大半をオンラインで実施した。全ての SLA を対象として，各セメスターの始期に活動説明会，終期に全体リフレクション会や活動報告会を開催した。これらの活動により期間を通した SLA サポート活動の目標の共有と，その目標に対する成果・課題のふりかえりを行った。セメスター中には SLA の担当分野別に「部会」（担当別研修会）を実施し，担当科目等に関する学習支援の課題の共有と対応の検討等を行った。その他にも，セメスター末には全 SLA に対してアンケートやヒアリングを実施した。そのデータや日頃の教職員による観察から得た情報に基づいて課題を抽出し，個別課題に応じた育成方針をセンター教職員で検討し，全体課題の精査を行った。理系科目担当 SLA には，3 月に北海道大学と，学習支援に従事する学生スタッフの合同研修をオンラインで実施した（詳細は後述）。

SLA 共通研修としては，次の 2 つの研修を行った。第 1 回は 9 月 30 日に開催し，CPD 戸村理先生より「大学・高等教育の発展・変化と大学という場について考える」，GLC 渡部留美先生からは「東北大学における留学生の現状と留学生ヘルプデスクの取組」という題目で，SLA に講義していただいた。第 2 は，講師を関西国際大学の伊藤創先生（日本語教育・言語学）に依頼し，日本語学習支援をテーマとした研修会「留学生が間違えやすい日本語と学習支援」を 4 回開催した。講義の内容は収録し，オンデマンド教材として 2021 年度以降も活用予定である。

3．情報還元による正課カリキュラムの改善・充実への貢献

学務審議会において半期ごとのセンターの利用状況・活動報告を行った。また，正課カリキュラムと学習支援センターでの活動を有機的に連携させるため，TGL プログラム「グローバルゼミ」に対して，レポートの書き方についての出前授業 1 コマ（90 分）を実施した（センター教員が担当，前期 4 クラス，後期 2 クラス）。今年度は，事前課題としてオンデマンド教材を作成・提供し，内容をより一層充実させることができた。その他，化学については，SLA 窓口の利用実態（相談内容や件数等）を，個人情報に配慮した上で科目委員会にフィードバックした。

4．正課カリキュラム外における学生の自主的な学習支援の支援・促進

学生の学習意欲の向上や教養への興味喚起，正課カリキュラム外での学習活動推進を図るため，SLA による学習支援活動を中心に様々な学習企画や学習支援活動を実施した。今年度はほとんどがオンラインでの実施となった。哲学カフェ「かんがえるソファ」は，平日（曜日は不定）の 16:30～18:00 を中心に，各回 90 分，オンライン（Zoom 利用）にて定期開催した。前期は想定を超える多くの参加申込があったため，後期は 1 回あたりの定員を 8 名にして実施した。年間で 23 回開催し，合計で延べ 173 名の参加があった。今年度の特徴としては，大学院生や留学生の参加等，参加者が多様化した点が挙げられる。

5．学内外における学習支援ネットワークの構築

学内では，機構内（他の業務センター）に所属する教員の協力を得て SLA 共通研修を実施することができた。また，留学生等への学習支援に関する情報交換や広報等において，グローバルラーニングセンターとの効果的な連携を継続できた。学外との学習支援ネットワークとしては，昨年度に引き続き，3 月 22 日に北海道大学との合同研修を実施した。今年度はオンライン実施とし， SLA6 名，北海道大学 TA6 名が参加した。理系科目支援に関する SLA と北海道大学 TA との情報共有や意見交換および交流を図った。

1．センター概要

学習支援センターは，2014 年度の高度教養教育・学生支援機構の発足に伴い設立された業務センターの一つである。その前身となったのは，高等教育開発推進センターにおける「SLA サポート室」の活動（2013 年度）であり，さらにはそれ以前の「全学教育学習支援プロジェクト―SLA（Student Learning Adviser）制度の実践―」（総長室付け，2010 年度～2012 年度）の活動が土台となっている。

2019 年度 6 月，「学習支援センター運営要領」を一部改訂した。

（1）理念・使命

学習支援センターの使命には，次の 3 点を掲げている。

(1) 学生の主体的・自律的な学習を実践的に支援・促進し，研究大学で学ぶ学生が習得すべきコンピテンシーを育成する。
(2) 初年次教育や学習支援に関する国内外の動向を調査研究し，大学における学習支援の質的向上に寄与する。
(3) 教職員・学生の間に「学び合い」文化を醸成し，学習共同体（ラーニング・コミュニティ）の形成に寄与する。

学習支援センターの支援対象は主に学部生を対象とした全学教育（教養教育）である。特に 1・2 年次学生にとっては，高校教育から大学教育への移行において「学びの転換」が課題となっており，その転換を実践的に支援・促進するのが本センターの重要な役割の 1 つである。

本センターの学習支援の特徴は，学習支援活動の主な担い手が「SLA（Student Learning Adviser）」と呼ばれる学生スタッフであることにある。「学生による学生のための学習支援」の在り方を模索し，開発していくことも本センターの使命の一つである。

（2）事業

学習支援センターが行う事業は，次の 4 点である。

(1) スチューデント・ラーニング・アドバイザー（SLA, Student Learning Adviser）制度の運用を基盤とした学習支援の開発・実施
(2) 正課カリキュラムの改善・充実への貢献および全学教育に対する教育開発支援
(3) 正課カリキュラム外における学生の自主的な学習の支援・促進
(4) 学内外における学習支援ネットワークの構築

本センターでは，高大接続の円滑化と大学教育での「学びの転換」，そして「単位制度の実質化」に対応するため，大学初期段階での学びのスタートアップ支援を行う。研究大学における学習支援としては「リメディアル教育」に資する支援を行うと同時に，学生が学修を深化させ，あるいはより幅広い学習へと拡張していくための「レベルアップ」のための支援を開発・実施していく。

（3）センタースタッフ構成（2020 年度）

センター長　芳賀　満　高度教養教育・学生支援機構　教授，考古学

副センター長　佐藤智子　同　准教授，生涯学習・社会教育

センター員　縣　拓充　同　助教，教育心理学・認知科学・美術教育

中島啓貴　同　助教，数学・幾何学

堀越徳子　教育・学生支援部 教務課，事務補佐員

SLA　前期 36 名，後期 41 名　（下表のとおり）

2020 年度 SLA 一覧

	担当	名前	所属	学年	活動開始	備考
1	物理	髙根 大地	理	D3	2014 年前期～	シニア SLA
2		赤池 瑞生	理	M2	2018 年後期～	
3		木下 豊	理	M1	2021 年前期～	
4		松井 理輝	理	B4	2019 年前期～	
5		狩生 宏喜	理	B4	2020 年前期～	
6		鈴木 善久	理	B4	2020 年前期～	
7		安田 陸人	理	B4	2020 年前期～	
8		中村 牧人	理	B4	2020 年後期～	
9		中村 悠斗	工	B3	2020 年前期～	
10	数学	吉澤 研介	理	D2	2019 年前期～	
11		渡辺 孝佳	理	D1	2018 年前期～	
12		森 祥仁	理	D1	2021 年前期～	
13		木村 藍貴	理	D1	2020 年前期～	
14		佐藤 俊	工	M1	2018 年前期～	
15		竹平 航平	理	M1	2019 年前期～	
16		松本 悠太	工	B4	2020 年後期～	
17	化学	三上 進一	理	D2	2017 年前期～	シニア SLA
18		能沢 真由	理	M2	2019 年前期～	
19		中村 祐輝	工	M1	2018 年後期～	
20		千葉 湧太	理	B3	2020 年前期～	
21		三上 翠跳	理	B3	2020 年前期～	
22	英語	田村 惇	文	D1	2019 年後期～	
23		金 弋	工	M2	2019 年後期～	
24		韓 吉輝	工	M2	2018 年前期～	
25		田中 祥平	理	M2	2020 年前期～	

26		水野 彩子	薬	M1	2018 年前期～	
27		千葉 絵理奈	工	M1	2019 年前期～	
28		森坂 太一	教	B4	2020 年後期～	
29	ライティング	中野 惟文	文	D3	2020 年後期～	
30		伊藤 愛莉	教	D2	2019 年前期～	
31		相原 貴次	文	D1	2019 年前期～	
32		服部祥英	工	M1	2020 年後期～	
33	日本語	鏡 耀子	文	D1	2018 年後期～	
34		松谷 凌雅	文	B4	2019 年前期～	
35		高山 翔園	経	B4	2019 年後期～	
36		野崎 舜介	理	B4	2020 年前期～	
37		江村 玲	文	B4	2020 年後期～	
38		小川 晴生	経	B4	2020 年後期～	
39	企画	西塚 孝平	教	D1	2018 年前期～	
40		飯田 司	理	B4	2019 年前期～	
41		坂本 瑞生	文	B4	2020 年前期～	
42		須田 華	工	B3	2020 年前期～	
43		渡辺 楓	理	B3	2020 年前期～	
44		高野 晴来	工	M1	2020 年後期～	

渡辺 孝佳

2020年度　学習支援センター活動報告

◆SLAの体制：前期36名（新規11名）、後期41名（新規8名）

内訳	物理	数学	化学	ライティング	英会話	日本語	企画
前期	8	6	5	2	6	4	5
後期	8	6	4	4	7	6	6

◆年間総利用者数（延べ数）：1,467人　1日平均：10 .6人

	2020年		2019年	
	利用者数	開設コマ数／開催回数	利用者数	開設コマ数／開催回数
理系科目［窓口利用］	460	50コマ	1,011	59コマ
英会話［1on1］	435	18コマ	449	18コマ
ライティング［窓口利用］	89	8コマ	224	12コマ
ライティング［セミナー］	0	0回	216	19回
日本語会話［1on1］	289	10コマ	243	57回

※その他、学習イベントへの参加者数　116名

2020年度重点目標とその概要

①　Web会議システムを活用した遠隔支援体制の構築・運用

●Web会議システムとG Suite for Educationを活用したSLAサポート窓口支援の実装

→詳細は、IEHE紀要（第7号）にて執筆。

＊報告「学習支援センターにおけるオンライン学習支援システムの構築」

②　オンラインによる学習企画や情報発信の企画と試行

●哲学カフェ「かんがえるソファ」の定期開催　（企画SLA）

●Twitterによる学習情報発信（理系SLA, 英会話SLA）

③　オンデマンド教材の開発

●TGLプラグラム「グローバルゼミ」への出前授業における事前課題としてオンデマンド教材を作成（教員）

【2020年度の傾向】 理系科目

- ●窓口：数学・物理・化学ともに、大幅に利用減
  - 考えられる要因
    - 4月のオリエンテーション中止・オンライン化等により、1年生に向けて、例年の広報が機能しなかった
    - 事前予約制・オンライン対応に移行したことによる利用の敷居の高まり
    - 理系科目の授業の内容・方法の変化　　など
- ●対面支援への要請
  - オンラインと対応併用時（10～12月）は、約8割が対面での利用となった
    - 理系科目支援では対面支援の方が利用しやすい？
- ●留学生による利用件数が増加

【2020年度の傾向】 ライティング

- ●個別対応型支援（窓口型）：留学生利用が大半
  - 前後期とも、留学生による日本語チェックを中心とした利用が多数を占めた
  - 授業連携を停止
    - 昨年度は授業連携により利用者が急増したものの、受入の許容人数を超えて混乱したため
- ●企画発信型支援（イベント型）：入門ゼミ不開催
  - 「『レポート指南書』入門ゼミ」の不開催
- ●授業連携型支援：TGLプログラムとの連携
  - 前年度に引き続き、TGLプログラム「グローバルゼミ」に対し、レポートの書き方に関する出前授業1コマ（90分）を実施
  - センター教員が担当
  - 前期4クラス、後期2クラス

【2020年度の傾向】 英会話

●窓口：利用者実数の増加・利用者の多様化

- オンライン化に伴い、複数人参加型ではなく、1対1の支援に特化して実施
  - 利用者延べ数は減少、利用者実数は増加
  - 高いリピーター率
- 川内キャンパス以外に通う学生の利用が増加
  - 特に、4年生や大学院生の利用が増加
- 休み期間中の継続を希望する声が多かったことから、2月中に延長して実施

●イベント：不定期に、英語を通した交流イベントを開催

- 「SLA英会話体験week」「SLA英会話 New Year's Party」をオンラインで開催

【2020年度の傾向】 日本語会話

●SLAを増員、体制強化

- SLAを、前期4名、後期は6名に増員し、体制強化

●窓口：オンライン化により、1on1に変更

- 2月中に延長して実施
- 昨年度に比べてさらに利用者が増加
- 高いリピーター率
- 利用の大半は中国語圏出身者
- 日本語レベルも多様で初級者利用もあるが、割合としては、N1レベルが多数
- 所属学部・研究科は多様

【2020年度の傾向】 学習イベント

●「かんがえるCafe」(新入生対象イベント)

- 「かんがえるソファ」の新入生向けプレ企画
- オンライン授業により1年生同士の交流が困難にな→1年生の交流と対話を目的としたイベントを実施
- 「大学での学びのイメージは？」「何か不安なことはある？」というようなテーマで対話

●「かんがえるソファ」:

- 平日の16:30～18:00を中心に開催(各回90分)
- 普段「当たり前」だと思っているような何気ないことについて、学生同士で考え対話する企画
- 参加者数が増加 (ただし定員を設けている)
- 多様な学年・学部／研究科からの参加者

まとめ

◆SLAサポートのオンライン化

- 新型コロナウィルス感染拡大への対応として
- オンライン支援体制の構築
- 今後も、オンライン支援を積極的に併用する方針

◆学生の利用傾向

- 理系科目の窓口利用が減少
- ライティングは、1年生の利用がほとんどなし
- ライティングの、留学生の利用は増加傾向
- 英会話、日本語会話の利用は定常的に多い傾向
- 哲学カフェ「かんがえるソファ」への参加者増加

学習支援センター（SLA サポート）2020 年度活動報告　（詳細版）

１．2020 年度 SLA サポート事業重点目標とその成果

①Web 会議システムを活用した遠隔支援体制の構築・運用 ：
Web 会議システムと G Suite for Education を活用した SLA サポート窓口支援の実装
→詳細は、IEHE 紀要（第 7 号）にて執筆。
＊報告「学習支援センターにおけるオンライン学習支援システムの構築」

②オンラインによる学習企画や情報発信の企画と試行 ：
哲学カフェ「かんがえるソファ」の定期開催．Twitter による学習情報発信（理系科目、英会話）
英会話イベント（体験 Week、New Years Party、春の合同自主トレなど）

③オンデマンド教材の開発 ：
今年度は、TGL プラグラム「グローバルゼミ」への出前授業における事前課題としてライティング教育教材を作成。一般学生に公開するオンデマンド教材製作には至らず。

２．2020 年度 SLA サポート利用状況・活動報告

1）2020 年度 SLA サポート利用数

【前期】全利用者数：延べ 687 人（1 活動日当たり 10.3 人）、SLA 数：36 人（新規 11 人）
【後期】全利用者数：延べ 780 人（1 活動日当たり 10.8 人）、SLA 数：41 人（新規 8 人）
【年間】全利用者数：延べ 1467 人（1 活動日当たり 10.6 人）　　活動日数: 前期 67 日，後期 72 日

2）理系科目支援：オンライン化に伴い、活動形態が変更。また、大幅な利用減

- 実施形態
  - 4 月中に、オンラインで理系科目支援を行うシステムを構築。
  - google meet や jamboard を組み合わせることで、利用者の問題状況や計算過程を共有しながら、オンラインで学習支援を行うことを可能にした。
  - サポートのオンライン化に伴い、従来の drop in 方式から事前予約制に変更。
  - 大学の BCP レベルが 2 以上であった前期、並びに 1 月以降は、オンラインのみで実施。10-12 月の期間は、オンラインと M 棟での対面相談を併用。

＜表 1. 2016～2020 年度利用者数等変遷 理系＞

	2016	2017	2018	2019	**2020**
前期（延べ）	972	468	441	625	**259**
後期（延べ）	762	332	288	386	**201**
合計（延べ）	1,767	800	729	1,011	**460**
予約枠数	-	-	-	-	**1275**
予約枠充足率	-	-	-	-	**36.1%**
合計（実数）	356	240	224	257	**160**
開設コマ数	112	68	52	59	**50**

- 利用傾向：
  - どの教科も、大幅に利用減。その背景には、1)4 月のオリエンテーションの中止やオンライン化により、1 年生に向けた例年の広報が機能しなかった、2)事前予約制・オンライン対応に移行したこ

とにより利用の敷居が高くなった、3)理系科目の授業における内容・方法面の変化が影響した、などが推測される。

- 対面・オンラインの対応併用時は、約 8 割が対面での対応。
- 留学生に対する対応数の増加。

- その他：SNS を用いた学習情報の発信活動を拡充。
  - 講義党内でのポスター掲示による周知が難しかったため、Twitter を中心に SNS で学習情報を継続的に発信。1 年生を中心にフォロワーも増加し、一定の反響があった。

＜表 2. 2016～2020 年度　科目群別利用者のべ数比較 理系＞

科目群(授業)名	2016	2017	2018	2019	**2020**
物理	463	247	138	271	**153**
数学	666	285	349	436	**203**
化学	181	82	98	112	**48**
自然科学総合実験	82	21	52	45	**20**
数学物理学演習	359	155	90	136	**30**

3）ライティング支援：留学生のライティング利用の定着

- 個別対応型支援（窓口型）
  - 昨年度は授業連携により利用者が急増したものの、受入の許容人数を超えて混乱したため、今年度は授業連携を停止した。
  - 前後期とも、留学生による日本語チェックを中心とした利用が多数を占めた。
- 企画発信型支援（イベント型）「『レポート指南書』入門ゼミ」の不開催。
  - 例年実施していた「入門ゼミ」を今年度は開催しなかった。（理由としては 2 点。コロナウィルス感染拡大による影響への対応で余裕がなかった点と、今年度は基礎ゼミにおいて同内容を約 2400 名に及ぶ受講生に提供したため、別途の開催の必要性が薄れたことによる。）
- 授業連携型支援：出前授業を実施。
  - 前年度から引き続き、TGL プログラム「グローバルゼミ」に対して、レポートの書き方についての出前授業 1 コマ（90 分）を実施（センター教員が担当、前期 4 クラス、後期 2 クラス）。今年度は、事前課題としてオンデマンド教材も提供し、内容をより充実させることができた。

＜表 4. 2016～2020 年度利用者のべ数変遷　ライティング＞

A. 個別対応型支援（窓口型）

	2016	2017	2018	2019	**2020**
前期（延べ）	34	68	31	146	**42**
後期（延べ）	27	35	21	78	**47**
合計（延べ）	61	103	52	224	**89**
予約枠数	-	-	-	-	**175**
予約枠充足率	-	-	-	-	**50.9%**
合計（実数）	56	70	37	111	**34**
開設コマ数／開催回数	21	14	10	12	**8**

B. 企画発信型支援（イベント型）

2016	2017	2018	2019	**2020**
40	84	262	202	**-**
-	4	-	14	**-**
40	88	262	216	**-**
-	-	-	-	**-**
-	-	-	-	**-**
-	-	-	-	**-**
9	47	30	19	**-**

4）英会話支援：オンライン化に伴い、利用者の多様化

- 実施形態
  - オンライン化に伴い、複数人参加型ではなく、1on1 の形式に特化して英会話支援
  - 従来の drop in 方式に変わり、事前予約制にした。
  - 新規利用者獲得・利用促進、および利用者同士の交流のため、不定期に複数人参加型のイベント（「SLA 英会話体験 week」「SLA 英会話 New Year's Party」「SLA 英会話　春の合同自主トレ」）をオンラインで開催。8 回開催し、合計 60 名が参加。
  - 休み期間中の継続を希望する声が多かったことから、2 月中に延長して実施。
- 利用傾向
  - 複数人参加型のカフェをほとんど実施しなかった影響で、利用者延べ数は減少したものの、利用者実数は増加。
  - 高いリピーター率。
  - オンライン化の影響で、川内キャンパス以外に通う学生の利用が増加。特に、4 年生や大学院生の利用者が大幅増。

＜表 3. 2016～2020 年度利用者のべ数変遷　英会話＞

	2016	2017	2018	2019	**2020**
前期（延べ）	312	306	242	232	**164**
後期（延べ）	206	180	247	217	**271**
合計（延べ）	518	486	489	449	**435**
予約枠数	-	-	-	-	**524**
予約枠充足率	-	-	-	-	**71.6%**
合計（実数）	130	110	73	91	**129**
開設コマ数	44	30	18	18	**18**

※ 2020 後期延数には「英会話体験 week」「New Year's Party」「春の合同自主トレ」の 60 名が加算されている．なお，2020 実数及び予約枠充足率には加算されていない．

5）留学生向け日本語会話支援：オンラインによる 1on1 支援に変更

- 実施形態　オンライン化に伴い、1on1 形式に変更した。
  - 日本語会話支援担当の SLA を、前期 4 名、後期は 6 名に増員し、体制強化。
  - 新型コロナウィルス感染拡大の影響によるセッションのオンライン化により、前年度までのカフェ形式から、1on1 形式に変更。

＜表 5. 2018～2020 年度利用者数等変遷　日本語会話＞

	2018	2019	**2020**
前期（延べ）	21	99	**109**
後期（延べ）	34	144	**180**
合計（延べ）	55	243	**289**
予約枠数	-	-	**390**
予約枠充足率	-	-	**74.1%**
合計（実数）	20	50	**111**
~2019: 開催回数 2020: 開催コマ数/週	30	57	**10**

- 利用傾向
  - カフェ形式から 1om1 に切替えた上で、昨年度に比べてさらに利用者が増加。
  - 利用者の大半は、中国の中国語圏出身者。
  - 日本語レベルも多様で初級者利用もあるが、割合としては、N1 レベルが多数。
  - 所属学部・研究科は多様。高いリピーター率。

6）学習企画・イベント：学習イベントの拡大・定期実施

- SLA による企画・イベント
  - **「かんがえる Cafe」**：学部 1 年生を対象に、4 月後半にオンラインで開催した新入生対象イベント。60 分間のワークショップを 6 回実施。計 24 名の 1 年生の参加があった。後述の「かんがえるソファ」の新入生向けプレ企画だが、より気軽に雑談できるような雰囲気を重視して、「大学での学びのイメージは？」「何か不安なことはある？」というようなテーマで対話を行なった。
  - **「かんがえるソファ」**（イベント）：平日（曜日は不定）の 16:30～18:00 を中心に開催（各回 90 分）。普段「当たり前」だと思っているような何気ないことについて、学生同士で考え対話する企画。2020 年度後期は 1 回あたりの定員を 8 名にして実施。

＜表 6. 2018～2020 年度「かんがえるソファ」参加者数　企画＞

	2017	2018	2019	**2020**
前期（延べ）	-	27	10	**92**
後期（延べ）	-	68	122	**81**
合計（延べ）	29	95	132	**173**
開催回数	7	22	18	**23**

7）利用学生の声：高い満足度、対話しながら学ぶ機会の重要性

- 利用満足度平均：96.9　（100 点満点／回答者数 839 名／イベントは除く）

＜表 8 利用学生アンケート（一部）＞

【理系】おかげで自分がわかっていなかった部分がわかりました。ありがとうございました。/　1 週間悩んでた問題が一瞬で解決しました。やっぱり誰かと協力して問題解決することは大切なんだなと思いました。/私が理解できているかどうか確認するために説明の時間なども設けてくれました。ありがとうございます。とても満足しました。

【英会話】初めての利用でしたが、英語のアウトプットをするいい機会になりました。もっと早くこの制度に気づけばよかったです...！３０分があっという間でした。/　継続して毎日英語を勉強し、それを実践する場として、効果的に使っていけるようしていきたいと思いました。

【ライティング】初めてのレポート作成だったので、引用のミスや重複などが多かったのですが、丁寧に教えて頂き有り難かったです。/　レポートに対する自信がなかったのですが、相談したことによって自分のアイデアに少し自信が持てました。アドバイスもいただけたのでこのまま頑張ってみようと思います。

【日本語】日本語の表現を教えたり、会話の中に出たおかしい表現も直してもらえたりをして、勉強になりました！/　今年、コロナなのであまり日本人としゃべる機会が多くないです。このように貴重な日本語会話のチャンスをいただいて本当にありがとうございます。

【企画】様々な意見を聞けたので、自分の生活や考え方を見直すうえでとても参考になりました。普段友人と会話する時は真面目に意見交換する、というわけにはいかないので、今回はとても良い経験になりました。学び合うという活動を効果的にできたと思います。/　頭をフルに使って自分の意見について深い議論ができたので、とても有意義で学びのある時間になりました！/　留学生の方々と話せたことは良い機会でした！

8）SLA 研修

- 活動説明会・活動報告会の実施
  - ♦ 前期（すべてオンライン開催）
    4/16 新任 SLA 研修会　4/22 前期活動説明会　/　8/12 リフレクション会
  - ♦ 後期　9/30 共通研修&後期活動説明会（オンライン開催）10/1 新任 SLA 研修会（対面実施）
    3/1 活動報告会（オンライン開催・予定）

- SLA 共通研修（オンライン開催）
  - ♦ 「留学生が間違えやすい日本語と学習支援」
    ・講師：伊藤創先生（関西国際大学）
    ・開催：計 4 回（12/22, 1/12, 1/26. 2/9）　各回 60 分（※実際には延長して 75~90 分程度実施）

- 北海道大学ラーニングサポート室との合同研修　3 月 22 日（月）14:00～17:00
  - ♦ 例年は東北大学（川内北キャンパス M 棟）にて開催していたが、今年度は Zoom にて実施。オンラインでの理系科目の学習支援について、情報共有・意見交換を行う。
    - ❖ 参加：東北大 SLA（6 名）：物理２，数学２，化学２名／学部生４，M院生１，D院生１名
      北大 TA（6 名）：物理１，数学３、化学２名／M院生２，D院生４名

9）『SLA SUPPORT GUIDE BOOK 2021』の作成

- 全学部 1 学生に配布。学習支援センターの利用案内、大学で学ぶ上で役立つヒント等を紹介。
- 留学生向けに、『SLA SUPPORT GUIDE BOOK 2021 for international students』を、オンラインガイドブックとして作成中。

10）研究成果

- 『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第 7 号（2021 年 3 月発行）への執筆

① 縣拓充・中島啓貴・佐藤智子・芳賀満（2021）「学習支援センターにおけるオンライン学習支援システムの構築―新型コロナウィルス感染拡大への対策として―」,『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第 7 号，pp.109-121.

（要旨）

東北大学学習支援センター（SLA サポート）では，学部 3 年生以上の学生を SLA（Student Learning Adviser）として雇用し，理系科目の学習支援，ライティング支援，英会話の学習支援，などを展開してきた.

2020 年度，新型コロナウィルスの影響で従来の形での学習支援事業の実施が困難となり，

その代替として急遽，オンラインでの学習支援を実施できる環境整備を進めてきた．本稿では，東北大学学習支援センターが構築した，リモートでの学習支援のシステムを紹介するとともに，その実施の中で明らかになった成果と課題について報告する．
特に初年次学生にとっては，オンライン化によってSLAの活動の様子が周囲から見えにくくなり，利用に対する心理的な敷居の高さとなった可能性が指摘できる．しかし，川内キャンパス以外に所属する多くの高年次学生にとっては，オンラインによりアクセスが容易となり，利用の増加に繋がった．

② 西塚孝平・佐藤智子「学習支援としての哲学対話実践の可能性―哲学カフェ『かんがえるソファ』を事例に―」，『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第7号，pp.191-204.

（要旨）

本稿は，東北大学学習支援センターで実践されている哲学カフェ「かんがえるソファ」を手がかりに，学習支援の一環として実施される哲学対話の特質と意義を解明し，効果的なデザインを提案することを目的とする．前者では，哲学対話を専門的資本によってコミュニティを成長させる場とみなしたうえで，参加者アンケートの分析を通じて，その特質を明らかにした．そして，この特質を基に意義づけられた哲学対話実践は，大学生特有の「活動システム」の矛盾を乗り越えていく拡張的学習として説明することができ，学習支援者は矛盾への自覚を参加者に促し，矛盾の弁証を支援する担い手となることを指摘した．後者では，身近なテーマ，対話に埋め込まれたアイスブレイク，共通と相違，抽象と具体を捉える対話の構造化，サブ・ファシリテーターの配置による意見収集と要約，思考プロセスの型を想定しながらの円滑で丁寧な進行，の5つを得た．

③ 玉田優花子・伊藤愛莉・縣拓充「ライティング相談窓口利用者のレポート改善の傾向と改善につながる支援方法―窓口利用前後のレポートの比較から―」，『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第7号，pp.282-289.

（要旨）

本研究は，個別相談型のライティング支援窓口における支援内容に対する効果を検証し，より効果的な支援方法を探るものである．具体的には，1）窓口では特にどのような点に着目した支援が多いか，2）利用者はどのような指摘をよく反映させ，どのような点は反映させられない傾向にあるか，3）どのような働きかけ時に利用者のレポートは改善されやすい・されにくいか，という3つの点を検討した．

利用学生が相談窓口で支援を受けた時点のレポートと，最終的に提出されたレポートから，支援内容および改善傾向について，量的・質的に分析した．その結果，特に頻繁に支援のなされているカテゴリは，構成ならびに引用に関わるものであることや，引用に関わる指摘の改善度は，相対的に低い傾向にあることが明らかになった．また効果的な支援方法として，修正すべきカテゴリを明確にして優先順位をつける，選択肢を複数提示する場合は対応中に方向性を決定する，具体例を用いた説明と抽象的な説明の双方を行う，という3つが提案された．

3. 研修実績報告

Summary

■活動説明会

活動説明会は、前期は 2020 年 4 月 22 日、後期は 2021 年 9 月 30 日に実施した。それぞれの活動説明会では、今年度の重点目標として「１．Web 会議システムを活用した遠隔支援体制の構築・運用」「２．オンラインによる学習企画や情報発信の企画と試行」「３．オンデマンド教材の開発」の 3 点を共有した。以上の 3 点はすべて、2020 年度当初より、新型コロナ・ウィルス感染拡大により、すべての授業がオンラインとなり、一時期は学生が構内立ち入り禁止にすらなってしまった状況に対処しながら、より効果的な学習支援をオンラインで実現するための体制構築と実践を目指したものである。

■リフレクション会・活動報告会

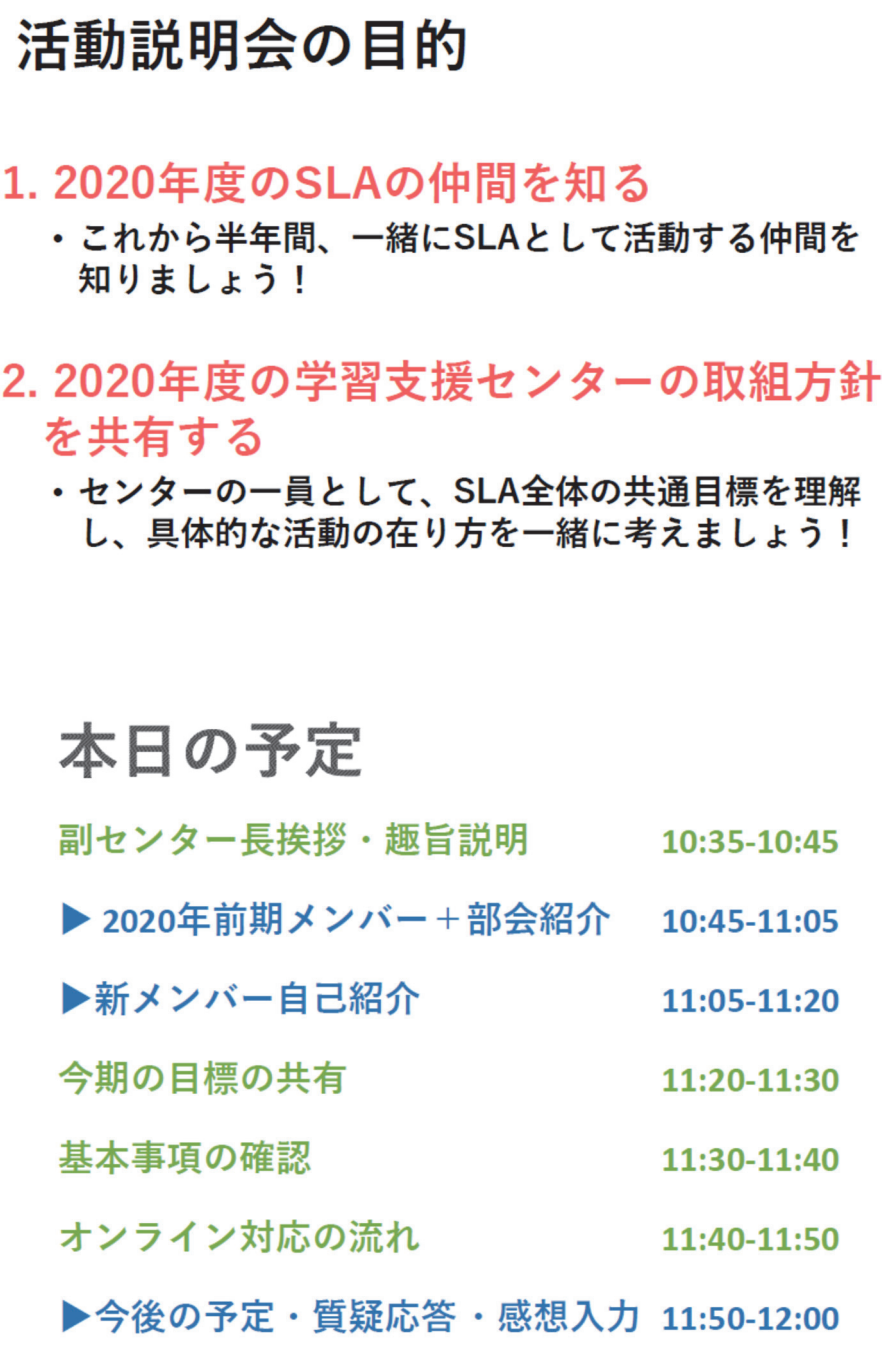
前期リフレクション会は 2020 年 8 月 12 日、後期活動報告会は 2021 年 3 月 1 日に実施した。リフレクション会や活動報告会の目的は、主に以下の 3 点である。第 1 に、活動説明会で全 SLA に共有した重点目標に基づき、各セメスターの活動をふりかえり、そのふりかえりの内容を SLA 相互に共有することである。第 2 に、ふりかえりに基づき、次期の活動に向けた成果と課題を整理する。第 3 に、通常の勤務の中では交流機会の少ない SLA 同士の交流の場とすることである。半期の SLA の活動概要と利用者の傾向分析を共有し、各部会から活動報告を行った上で、活動の全体的なふりかえりと SLA 相互の交流を行った。

■北海道大学との合同研修の実施

2020 年度は、3 月 22 日に、北海道大学ラーニングサポート室との合同研修をオンラインで実施した。SLA からは 6 名の学生（物理２，数学２，化学２名）が参加した。

1 活動説明会

1．前期活動説明会：2020 年 4 月 22 日（水）10:30-12:00



2020年度

学習支援センター 重点目標

1. Web会議システムを活用した遠隔支援体制の構築・運用　▶【全部会】

2. オンラインによる学習企画や情報発信の企画と試行　▶主に【企画】

3. オンデマンド教材の開発　▶主に【ライティング】

2. 今年度大きく変わるポイント

1) 原則、活動は全て「オンライン」

2) すべての対応をビデオ録画。カルテもオンラインに

3) 対応は「事前予約制」に

4) シフトは「コマ」単位ではなく、「時間」単位

5) 部会ミーティング・研修の変更点

1) 原則、活動は全て「オンライン」

- 今期、東北大学のすべての授業がオンライン化
- 当初は、SLAには大学に来てもらい、SLAのPCや設備を使ってオンライン対応を行うことを想定

↓

- 少なくともレベル3・4の期間は、原則SLAもリモートで活動してもらう方針

2) すべての対応はビデオ録画。カルテもオンラインに

- meetの機能を用い、対応は全てビデオ録画！
  - それにより全ての対応についてリフレクションやピアレビュー可能に

- カルテもオンラインで入力。対応に関わるファイルは全てオンライン上に保存
  →過去のカルテも、オンライン上で閲覧できるように

- アンケートもオンラインのフォームを使って

3) 対応は事前予約制に

- まずは「出入り自由」の形式ではなく、「事前予約」の形式をとり、利用者の人数を統制する
  - シフトに応じて、あらかじめ科目ごとの受付可能時間帯と人数を設定しておく
  - 利用者は、空いている時間から選択して予約
    - 基本的には先着順
    - 予約時に、氏名・学籍番号・所属・メールアドレス・質問したい授業名 etcを入力してもらう
    - 1度に1つ以上の予約はできないように設定

4) シフトは「コマ」単位ではなく、「時間」単位

- 対応前後には、始礼・ブリーフミーティングを、オンラインで実施
  - シフト外の人も覗けるようにするかも

- 基本は、1回のシフトごとに、計2.5 or 3.5時間の勤務に
  - 始礼15分
  - 対応2〜3時間
  - ブリーフミーティング15分

5) 部会ミーティング・研修の変更点

- 部会ミーティング
  - 全てオンラインで実施
  - 基本時間　1時間20分　→　1時間30分
  - 資料共有　M棟のネットワーク上のドライブ　→　オンライン上のドライブ or google classroom

- 活動説明会・報告会、夏期研修等
  - 給与は、実施時間の半分の時間数を基本
    - 30分未満の端数は30分単位で繰り上げ

今後の大まかな予定

4/24(金)	シフト希望調査〆切
4/30(木)	シフト仮案通知
5/7(木)	シフト最終決定
5/11(月)	理系対応開始

4/27 (月) ～5/9 (土)　オンライン対応の準備期間（模擬対応などを実施）

オンライン対応に向けての準備

- 対応開始前に、オンライン対応のシミュレーションを行いたい
  - オンラインでの一連の勤務の流れを体験する
  - 機器や接続の確認
  - オンライン対応の予行練習としての模擬対応

- 今週・来週あたりに何度か実施予定
  - 連休中になりますができれば参加を

2．後期活動説明会：2020 年 9 月 30 日（水）15:00-17:00

本日の予定

副センター長挨拶・趣旨説明　15:00-15:10

自己紹介　15:10-15:35
- ▶ 各部会紹介
- ▶新メンバー自己紹介

センターより　15:35-15:55
- ▶基本事項の確認
- ▶オンライン対応の流れ

ディスカッション　15:55-16:45

まとめ・感想入力　16:45-17:00

前期の振り返り

2020年度
学習支援センター 重点目標

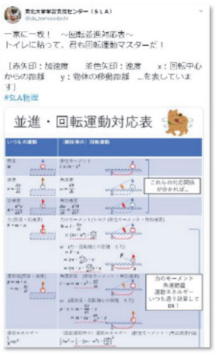
1. Web会議システムを活用した遠隔支援体制の構築・運用
2. オンラインによる学習企画や情報発信の企画と試行
3. オンデマンド教材の開発

前期の振り返り① 成果

・オンラインの対応，どの部会も最初は慣れないところからよく頑張った，感動した！
- 総利用者数　687名
- 平均満足度　96.6

・情報発信もいろいろ探索する中で，効果的なあり方が見えてきた？

Mr. twitter やっすん
6,800view／46いいね⇒



- 英会話・日本語・企画は，オンラインであることがプラスに働き，多様な層の学生が利用
  - 川内キャンパス以外に通う上級学年の学生

- 部会間で連携した対応の可能性が見えた？
  - 理系×英語
  - ライティング×英語
  - 日本語×ライティングも？

前期の振り返り②　課題

- 利用の敷居が高くなってしまった？
  - どんな支援が行われているか，傍目から見れない
  - 前もって予約する必要があるため，「丸投げ」系の利用者が減少
  - 広報の不足

- 「学びのコミュニティの醸成」につながるような支援には課題
  - オンラインではどうしても「対個人」の支援が中心

発信の枠組みも変わる

- 後期は前期よりも様々な発信が可能
  - 前期は，①学務情報システムのメール，②twitter，③センターweb page
  - 後期は，加えてポスター，掲示，口コミ等も利用可

- イベントも再開一部できるかも
  - 密を避けてできることから

◆シフト時間

- 授業時間と連動させるために予約時間を変更
  - 当面は2パターンの時間帯で実施

	前期	後期　火・木曜	後期　月・水曜
昼休み			
3限 （13:00～14:30）	■ 13:00～13:10 13:30～14:15	■ 12:50～13:00 13:20～14:05	■ 13:50～14:00 14:20～15:05
4限 （14:40～16:10）	14:30～15:15 15:30～16:15	14:20～15:05 15:20～16:05	15:20～16:05
5限 （16:20～17:50）	■ 16:30～16:45	■ 16:20～16:35	16:20～17:05 ■ 17:20～17:35

◆勤務について

- 勤務時間（拘束3h45m，給与3.5h）
  - 月・水：　13:50～17:35
  - 火・金：　12:50～16:35
- 始礼・ブリーフミーティング
  - 始礼は「M棟組」と「リモート組」に分かれて実施
  - ブリーフミーティングは全体で（@全体meet）
- 企画部会
  - メンバー同士で時間を合わせての，不定期の勤務

◆予約の仕方

- オンライン予約ページを，「理系」と「その他」で分けます！（たぶん）

	理系	英語・日本語・ライティング
予約方法	オンライン＆当日受付	オンライン予約のみ
対応方法	対面・オンラインの選択可	オンラインのみ
オンライン予約期限	前日（12時間前）まで	3時間前まで
当日対面予約受付	13時10分～	–
同時予約の制限	理系の中で一つ	英・日・ラの中で一つ

今後の予定

- シフト関連
  - シフト仮案連絡：　10/1（木）

シフト修正期間

  - シフト確定：　10/6(火)

- 窓口開始
  - 10/12（月）～

（広報は10/6（火）頃から）

2020 年後期活動説明会　集合写真

2 リフレクション会・活動報告会

1．前期リフレクション会：2020 年 8 月 12 日（水）13:00-16:00

リフレクション会の目的

- SLA同士の交流・親睦を深める
  - 他部会、他曜日シフトのSLAとはなかなか会えません
  - SLA全体が集まる数少ない機会です
- 前期リフレクションをしっかりと行い、後期に繋げる
  - 前期活動が「やりっぱなし」にならないように
  - 後期活動開始時に「前期なにしてたっけ？」を忘れないように
- SLAとして、経験から協同的に学ぶ場
  - 学習支援者としての「ともそだち」の場
  - 経験を通した学びを深め、個人の気づきをSLA全体に一般化

本日の構成

1. 開会 （10min）
2. センター前期活動報告 （20min）
3. 部会報告 （90min）
4. グループ・セッション （30min）
5. 閉会 （20min）

グループ・セッション （30min）

1. 自己紹介

2. アイスブレイク
   - 「私にとっての “オンライン” とは？」（漢字1文字で）
     →Chat活用

3. 各部会からの報告について、質疑応答

4. SLAオンライン対応Tipsについて議論する
   - オンラインの利点を最大化する
   - オンラインの弱点を最小化する
     →そのための方法や戦略とは？

２．後期活動報告会：2021 年 3 月 1 日（月）13:30-17:00

報告会（〆会）の目的

a. 後期活動のふりかえり

b. 来期に向けて成果と課題の共有

c. SLA修了生の送り出し

本日の流れ

❶ 学生の利用傾向速報

❷ SLA活動報告（各部会より）

❸ センターからの総括

❹ ディスカッション

❺ 卒業プレゼン&活動証明書授与

2020.2.20 SLA後期活動報告会　©Center for Learning Support(SLA Support),Tohoku university　無断転載等禁ズ

スケジュール

- 13:30～　会の趣旨説明+開会の挨拶（5分）
- 13:35～　学生の利用傾向速報（15分）
- 13:50～　SLA活動報告（10分×7部会+休憩）
- 15:10～　センターからの総括（15分）
- 15:25～　休憩(10分)
- 15:35～　ディスカッション(30分)
- 16:05～　卒業プレゼン&活動証明証授与(20分)
- 16:25～　コメントペーパの記入と写真撮影

2020.2.20 SLA後期活動報告会　©Center for Learning Support(SLA Support),Tohoku university　無断転載等禁ズ

●センターからの総括

【理系支援】物理 数学 化学

a)窓口対応

◎オンラインと対面のハイブリット支援に適応

- 大きな問題もなくうまく対応。接続トラブルにもうまく対処できるように
- オンラインによる支援のtipsも蓄積し、スキルも向上

△「教えること」が中心になってしまいがちに

- オンラインで、時間制限もあったため、どうしても「一緒に考える」割合が減ってしまった
- コロナの影響もあり、対面のリフレクションがあまりできず

☞ 対面での、教えすぎない対応をより意識し、スキルを磨こう

5

【理系支援】物理 数学 化学

b)企画発信

◎前期はtwitterを用いて積極的に学習情報を発信

◎twitter閲覧数が下がった後期は、様々な発信や企画を検討

- ホワイトボードによるM掲示
- 理系レポートに関わるイベントの検討
- 対応イメージを伝える動画の作成
- 来年度以降に向けた内部資料作り

△それでも時間を持て余した感

△発信の効果の手ごたえのなさ

- 対応が少ない時期はなかなか辛かった…

☞ 今期の成果・課題を踏まえ、来年度は効果的に発信をしていこう

6

ライティング

◎留学生に対してうまく対応

- 留学生に多数のリピーター
- 日本語のチェックにとどまらず、利用者のライティングスキルを高めるよう意識した対応

◎効果的に部会内での研修ができた

- メンバーが4人に増員したため、各シフトで積極的に振り返り
- それにより、対応の質が向上

△日本人の利用がほぼなし

・広報も打つことができず

☞ 来期は、主に1年生に向けて対面での対応を復活させる
「指南書ゼミ」などの企画も行い、入口のハードルを下げる

英会話

◎「オンライン」での1on1の効果的な支援方法を確立

- 利用傾向を見ての、カフェ中心の活動からの移行
- オンラインならではのtips

◎多様な利用者層・利用者ニーズに対応

- 高学年の利用者が増加。それに伴い、院試の面接対策やプレゼンの準備など、専門性の高い内容にも対応

◎オンラインによって失われた「利用者同士の交流」のための企画も、積極的に検討・実施

- 「体験week」「New Year's Party」「春の合同合宿」

△「利用者同士の交流を促すこと」にはまだ課題

☞ コロナ後はオンラインと対面の両方をうまく使い分けられたら

日本語会話

◎ワークショップ形式から1on1形式に移行し、うまく対応
- オンラインと1on1、2重の変更に対応

◎利用者の多様化
- 川内キャンパス以外に所属する留学生の利用増。海外からのアクセスも。　⇔　ほとんどが中国系の利用者

◎毎回しっかりと振り返り→気づきをすぐに対応に生かしていくサイクルの確立
- リピーター情報の共有や引き継ぎもスムーズに

△予約枠の制限もあるため、上級者の「出口」も用意したい
- 日本人の友人を作る、かんがえるソファの利用を促す、など

☞ 来期もオンラインを中心にし、より効果的な支援の形を

企画

◎「かんがえるソファ」は、ファシリテーションスキル、企画自体の質が向上
- ファシリテーションや、企画のデザインの工夫
- 毎回しっかりと振り返りを行い、反省点をその後に生かすことができた

◎リピーターも複数人作ることができた
- 川内キャンパス以外からの参加者が増加。留学生の参加者も
- かんがえるソファ参加者からのSLA志願者が！

△その他の企画には着手できなかった

☞ メンバーも増員される予定なので（？）、対面・オンライン両面で新しい企画を

1. 成果

◎オンラインでも、SLAらしいサポートができた！

- 利用者の様々なニーズに寄り添った、「学生同士」という立場を活かした学習支援
- Meetやjamboardをうまく活用

◎他のキャンパスの学生に対してアプローチしやすく

- 今までにない、高年次の利用者
- 遠方や海外に滞在している学生・留学生の利用も

◎google classroomをうまく活用

- シフトを越えて利用者情報を共有
- 発信作業の分担も円滑に
- ビデオリフレクションが活発化

2. 課題（主にサポ室の反省点）

△1年生への周知不足

- 学務情報システム以外の広報手段を持つ必要性

→理系科目は授業で直接紹介してもらうことが有効か

△利用のハードルが上がってしまった可能性

- 事前予約制で、フラっと参加できない
- 複数人で利用しにくい
- 利用してみないと、どんな様子かわからない（外から見えない）

→対面の復活、利用の入口になる企画（体験会など）、対応のイメージ動画の配信などを検討

△異なる部会のSLA同士の交流が減少

- 名前も顔も知らないようなメンバーも？

3 SLA 共通研修「留学生が間違えやすい日本語と学習支援」

（1）主旨・概要

近年、当センターでは留学生を対象とした日本語学習支援の体制整備を進め、支援を質的にも量的にも拡充すべく取り組んできた。おおよそ体制整備が整ってきたが、日本語学習支援に従事する SLA も教職員も「外国語」として日本語を習得していないため、留学生が日本学習の過程でつまずきやすいポイントや、それに対して、母語話者の立場からどのように学習支援をすればよいのか明確な方向性が見いだせずにいた。そこで、日本語や日本語教育を専門とする研究者を講師として招き、日本語を外国語として学ぶ学習者に対する学習支援の理念や方法について講義いただくこととした。

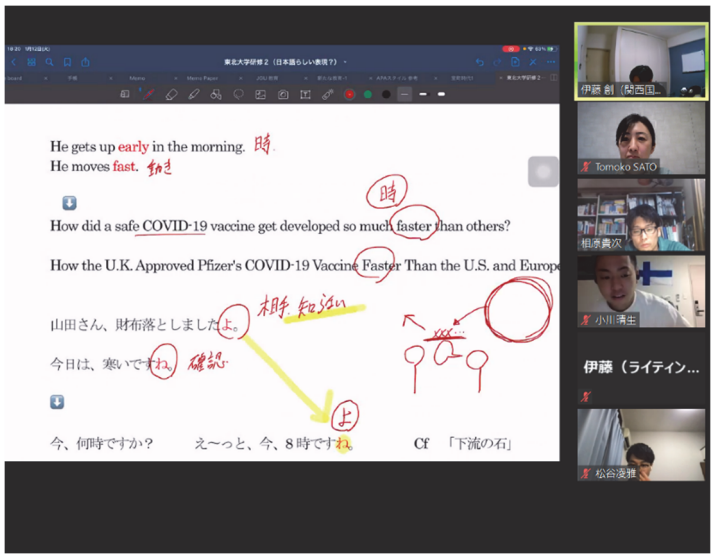
概要としては、留学生の日本語習得において難しい側面の 1 つとして「機能表現」があること、その要因としては「機能表現」には外在的な現象をどう認知的に切り取るかが顕著に現れ、それが言語によって異なることなどを説明いただいた。日本語として適切な表現と、「日本人らしい」表現とは異なるという考え方の下では、外国語として日本語を学ぶ学習者は、必ずしも「日本人らしさ」を目指す必要はないということであった。成果として、学習者自身の文化的背景や学習状況に応じた学習支援の考え方を学び、SLA サポート支援における日本語学習支援の方向性を見定めることができた。

（2）講師

伊藤創　先生　　関西国際大学国際コミュニケーション学部　准教授（研修当時）
専門分野：日本語学・日本語教育

（2）開催日時・場所

・開催日：
　第 1 回　2020 年 12 月 22 日（火）
　第 2 回　2021 年 1 月 12 日（火）
　第 3 回　2021 年 1 月 26 日（火）
　第 4 回　2021 年 2 月 9 日（火）
・開催時間：各回 18:00～19:00
・実施方法：オンライン（Zoom を使用）



（3）参加者の感想（一部）

第 2 回

- 「日本語らしい日本語」と「日本人らしい日本語」という 2 つの対比はとても分かりやすかったです。
- 日本語母語話者の日本語を強要してはいけない、というお話がありましたが、たしかに「間違っている表現」と「日本語母語話者は使わない表現」は全然違うものだと思いました。留学生にフィードバックするとき、この違いについて明確にする必要があると思いました。
- 今日の若干抽象的な話は、素朴に「こうだよな」と思っていたことが説明されたという感じの内容でした。（中略）自分としては、実践の中で留学生と折り合いをつけつつ、その上で自分たちの実践をしっかりと振り返って次につなげるしかないのではないか、と思いながら聞いていました。
- 大変興味深く拝聴しました。質問させていただいた通り、個人的には「配慮」について考える機会となりました。（中略）教育者をはじめとして「日本人らしさを目標とすべきでない」と考え

る人がいる一方で、どうしても日本人らしい配慮の示し方を要求し、そうしない非母語話者を良く思わない人もいると思います。多くの人が前者の考えを持ってくれれば一番良いと思いますが、後者のように考える人がいるのも至極当然のことで、いけないことというよりも仕方のないことだと思います。そのような人の考えを変えるのは難しいため、学習者に配慮の仕方をある程度教えることはやはり必要なのかなと思いました。

第 3 回

- 自動詞と他動詞についてとても興味深いお話をありがとうございました。よく留学生は「私の母が～と言いました」のような表現をよく使い、なんとなく変だな～と思っていたのですが、それは自他の違いだったのかと気づきました。SLA に来る留学生はかなり上級者の方が多く、ただ聞いているだけでは何も指摘することがないことも多々あるので、こういった自動詞の使い方について教えてみるのも一つの手だと思いました。
- 英語と日本語の視点の違いに着目したことが無かったこともあり、「神の視点」と「虫の視点」の違い、非常に興味深く感じました。自動詞・他動詞について留学生が間違う原因がよく理解できました。とても面白かったです。ありがとうございました。
- 自動詞と他動詞の使い分けが、言語的な物の認識論につながっていることがわかり、非常に興味深かった。特に、自分自身が自然な日本語に直せなかったとき（もっと勉強しようと思いますいた)、いかに自分が無意識のうちにその選択を行なっているかを再認識させられ、外国語話者にとっては非常に習得が難しいのだと感じた。また、川端康成の文章の訳によって、あそこまでイメージが変わってしまうことは、言語の限界を感じ、少し寂しいようにも思った。

第 4 回

- 主語/主題優先の話を伺って、知らず知らずのうちに、英語で学んだ主語優先の文法（こちらの方を「言語」として重点的に学んだので）を一般化して言語の構造を考えていたなあと感じました。よく「言語が違うと思考が違う」のようなニュアンスの言葉を聞きますが、これだけ多様な言語それぞれに、このように根本的な部分の違いがあるとしたら、確かにモノを見たときの捉え方も大きく異なってくるんだろうなと実感しました。
- 「主語」と「主題」という観点からの言語的な構造の違いや、日本の会話の中における主題の重要性について非常によく理解することができた。特に、共感度の高さによって主題を決定するというお話は、和を重んじるという日本の文化的な側面にもよく当てはまっているなあと思い、個人的にとてもしっくりきた。また、後半の質問の中でも、ている・てきたの違いや時制の間違いへのアプローチをしっかり学べたので、ぜひ今後日本語セッションに活かしていきたいと思う。
- 研修をのおかげで、「中国語話者の文章がどうしてこうなるのか？」「間違ってはいないけど違和感を感じるのはなぜ？」という疑問がすっきりしました。特にレポートを見ているとき私が良くする問いかけは「どうしてこの文は受け身にしたのかな？」「この文の主語はなにかな？（今思えば主題のことかもしれません)」「この助詞に対してこの動詞の形でよいかな？」というものだったので、研修を受けて、そういう理由があったのか！と腑に落ちました。

4 北海道大学との合同研修の実施

（１）概要

今年度は北海道大学との合同研修をオンラインにて実施した。合同研修の活動概要は次表の通りである。

＜2020 年度他大学合同研修開催要項＞

企画名	2020 年度　学習支援スタッフ合同研修会
企画運営	東北大学 学習支援センター／北海道大学 ラーニングサポート室
趣旨	大学生に対する学習支援を担うセンター間の交流と情報交換、そして研修の合同実施等を通して、相互の組織運営体制や学習支援事業改善につなげる。特に、学習支援スタッフとして活動している学生同士を交流させることにより、自らを客観的に見つめ、これまでの活動をふり返る機会や場としつつ、学習支援者としてのさらなる能力向上やスキルアップを図る。今年度は両センターでオンライン対応を開始したため、対応のオンライン化に係る課題や工夫等について情報共有および意見交換を行った。
場所	Zoom ミーティングルーム
事前準備	各大学の概要等情報共有など
日程	2021 年 3 月 22 日（月）
参加者	■東北大学 教職員：縣拓充、中島啓貴、堀越徳子 SLA：6 名 ① 鈴木　善久　理学　B4　物理（SLA 歴：1 年） ② 安田　陸人　理学　B4　物理（SLA 歴：1 年） ③ 木村　藍貴　理学　D1　数学（SLA 歴：2 年） ④ 佐藤　俊　　情報　M1　数学（SLA 歴：3 年） ⑤ 三上　翠跳　理学　B3　化学（SLA 歴：1 年） ⑥ 千葉　湧太　教育　B3　化学（SLA 歴 1 年） ■北海道大学　高等教育推進機構高等教育研修センター　ラーニングサポート室 教職員：須田　裕介　　LSO 特定専門職員 佐々木　伸　　LSO 特定専門職員 TA：6 名
スケジュール	14:00～15:00　趣旨説明、自己紹介、アイスブレイクなど 15:00～16:00　【第一部】両大学からの取組概要説明 16:00～17:00　【第二部】意見交換会

（２）目標

1. **【自己理解の深化】**活動報告(アウトプット行為)によって自身の活動の自覚化・相対化を促進する。
2. **【具体的改善策の知見の獲得】**他機関の活動を知ることを通して、自身の活動の固定概念を砕くと共に、活動改善のヒントや今後の新たな活動を考えるヒントを得る。
3. **【モチベーション向上】**実際に他大学で類似の目的の下で活動している「人（学生)」との出会い・交流を通して、活動の関心・意欲の向上につなげる。

（３）構成

今回の合同研修では、第一部として両大学での今年度の取り組みの報告を行い、第二部にて意見

交流を行った。

【第一部】 各大学から運営方針および今年度の活動内容について報告
　目標における【自己理解の深化】の達成のため、学生主体での今年度の活動内容についての報告を行った。特に今年度は両大学が対面対応からオンライン対応への変更を迫られたため、オンライン対応の方法や困難等について共有した。また、各大学の組織の特性についての説明についても行った。
【第二部】 今年度の活動内容に関しての意見交換および相互交流
　第一部における両大学の報告を踏まえ、質疑応答および意見交換を行った。オンライン形式での理系対応の要領や、今年度の学部一年生の現状を考慮した情報発信のありかた等について議論がなされた。

1 物理部会

2020年前期リフレクション 物理部会

物理部会 博士課程後期3年 高根大地

(1) 今期の質問内容の傾向
(2) オンライン対応について
(3) twitter発信関連
(4) 今期まとめ＆来期に向けて

(1) 今期の質問内容の傾向

質問

S1. 回転運動に関する質問増加

S2. ベクトルの微積分・座標変換増加

S3. 式の導出・意味についての質問増加

S4. 数物の質問の減少

利用者

R1. ”丸投げ系”の減少

R2. 反応が極端に薄い人の減少

R3. Advancedな学習者減少

R4. 自身のレベルがつかめていない人増加

原因

・スライド授業で式展開をしない(S3)

・授業ごとの質問窓口整備(S4)

・SLAのシステム変化(R1,R2)
(問題意識を持った人のみ来る)

・学生間のおしゃべりの減少(R1, R4)

(2) オンライン対応のメリット・デメリット

メリット

1. 予約制で業務の見通しが立つ
2. 45分を前提として学生が来る
3. カルテなどの作成・編集が楽に
4. シフト間の協力がはるかに改善
5. 対応が高い確率でビデオ化される

デメリット

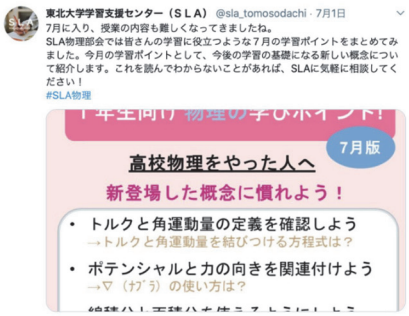
1. 絵以外での伝達が難化
2. 一方的な対応になりがち
3. ノート、教科書などアナログ情報にアクセスしにくい

メリット3～5 はオフラインでも残すことが可能！
デメリットをどう改善するか

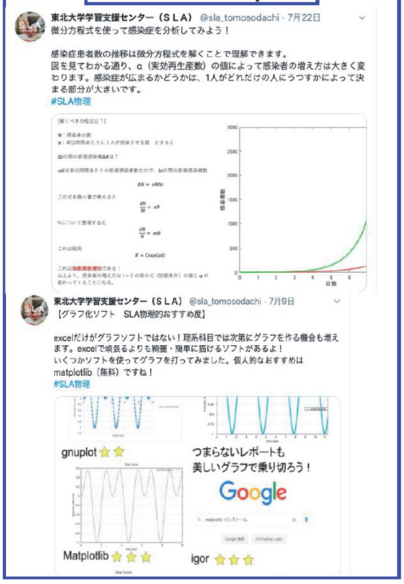
オンライン対応に対するノウハウの蓄積＆共有

(3) twitter発信について

A: まなびのポイント



B: 物理Tips



C: 作品紹介

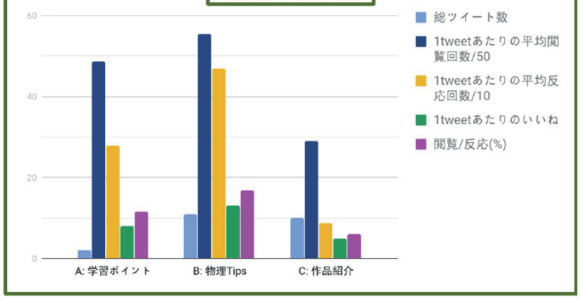
(3) twitter発信について

発信までの流れ

①起案
②草案作成(要確認情報へ)
③各員チェック
④最終チェック＆発信

作業時間
A: 1.5 (人・時間/tweet)
B: 3 (人・時間/tweet)
C: 0.2 (人・時間/tweet)
(※肌感覚)

統計情報



B:物理Tipsが需要高い が コストも高い

↓

[需要] [SLAのスタンス] [頻度]のバランス

TwitterでSLAを知ったという1年生利用者も！

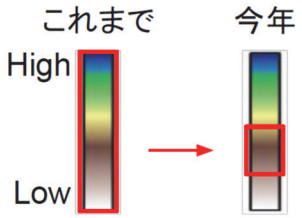
(4)今期まとめ＆来年度にむけて

今期まとめ

質問・利用者: 中層下位に利用者集中

Twitter発信: 週2程度のツイートで一定の成果

オンライン化:対応場面以外ではメリット多



来期にむけて

質問・利用者: SLA存在周知。下層へのアプローチ模索

Twitter発信: 発信内容/割合に注意しつつ、認知度向上

対応:オンラインのデメリット解消法を模索

2020年度リフレクション
物理部会

物理部会
鈴木善久 松井理輝

今期の利用者傾向

質問内容

- **式の導出・意味**についての質問増加 (前期)
- 工学部の**物理学B**の質問増加 (後期)

利用者

- 丸投げ系の質問減少
- 反応が極端に薄い人の減少
- Advancedな学習者の減少
- **自身のレベルがつかめていない人の増加**

前期と後期は
ほとんど同じ傾向！

利用傾向とその分析

問題点

対面＋オンラインでSLAを利用する人が少ない。

＜通常時＞

増加要因

- **人づて**による認知度
- ふらっと立ち寄る **drop-in**

減少・停滞要因

- 利用者の**自立**
- 学習意欲の低下 (**あきらめ**)

増加要因　＜今年度 (オンライン化)＞

- ~~**人づて**による認知度~~
- ~~ふらっと立ち寄る **drop-in**~~

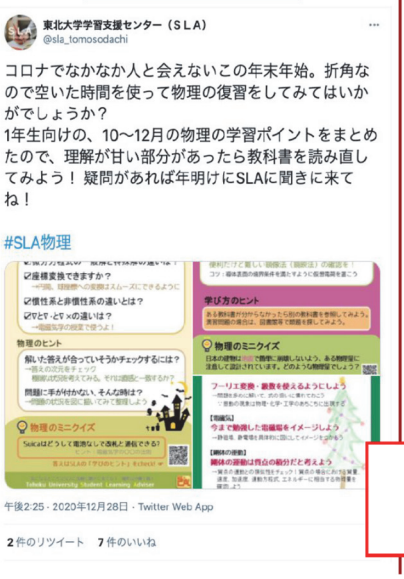
減少・停滞要因 (学生の二極化？)

- **孤独**に戦う学生 ⇈
- 学習意欲の低下 (**あきらめ**) ⇈

・学生間交流**減少**
・利用の**障壁が高い**
　の影響大

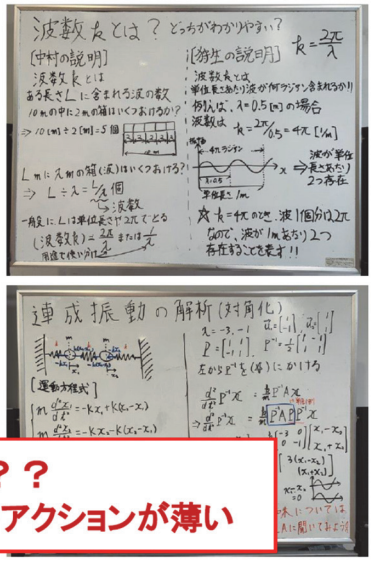
発信について

A: まなびのポイント



B: 物理Tips

C: ホワイトボード



学生への効果？？
後期はTwitter 発信に対するリアクションが薄い

来期に向けて今期始めたこと

外部向け

- SLA使い方動画の作成
- **理系レポートライティング企画**
- 新しい内容でTwitter発信
  - ・小説 (鈴木作(笑))
  - ・物理学者の逸話
  - ・レポート提出前にこれをしろ

内部向け

- 過去の資料まとめ
- (滞っていた)
  ビデオリフレクション

SLAの
認知度向上を狙う！

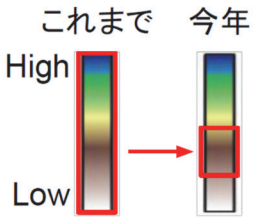
今年度まとめ＆来年度に向けて

今年度まとめ

質問・利用者：中層下位に利用者集中,**後期は利用減**

発信：前期は伸びたが後期は伸びず

オンライン化：対応しづらい面もあるが、**手法がほぼ定着**
ハイブリッド化も大きな問題は無し



来期に向けて

質問・利用者：SLA使い方動画,**理系レポート企画**を構想中

発信：**継続して行い**、発信内容/割合に注意しつつ新しい内容を検討

対応：オンラインのデメリット解消法を模索

2 数学部会

数学部会の活動報告

2020年前期活動報告会

2020年前期の傾向と分析

① 曜日毎の利用者数の傾向にばらつきがある
→ 課題の頻度が多い授業

② 利用科目（線形代数・解析学…）はまんべんなく来た
→ 例年通り、対面時と同様の傾向

③ 後半の方に駆け込み需要が多い
→ 期末レポートと思しき問題の質問。45分では足りないッ、、！

④ 理系科目では物理より圧倒的に数学の利用が（目に見えて）少ない
→ 例年のオフライン時の傾向と真逆。なぜ？

⑤ リピーターが少ない印象

オンライン対応に関して

○オンライン対応に関する気づき

- 利用者の手元にある教科書（本）を中心に対応を進めることは難しい？
  → 部分的になら写真を撮って画面共有or pdf 形式のレジュメなら共有可能
- こそあど言葉（この式は…）ではなく、具体的に式を明示しなければ利用者の混乱を招くかも
- 全体的に利用者の意識が高い（ある程度考えてから質問に来る学生が中心）

○オンライン対応における数学部会の工夫、意識したこと

- 時間制限のある中で、「締めの形」を明確に意識し、時間配分すること
- いま、どこについて話しているのか明確に利用者に伝え、視線、意識を誘導すること
- 発言や思考の過程が一方的なものにならないよう問を多めに対応した

発信活動1　書評

○目的

学習上参考になる書籍を紹介し、学習に役立ててもらう。

○手法

参考書に関する書評を作成し、Google siteにて東北大学の学生に限定公開。
(http://sla.cls.ihe.tohoku.ac.jp/learningtip/3891/)

○成功点、反省点

各SLAの知見を生かして充実した内容になっていた。
家庭学習が基本となっている昨今の状況にあった企画であった。
広報不足の為か、利用者は少なかった。(リンクのクリック数91)

発信活動2　数学部会からの挑戦状

○目的

SLAの利用促進や、問題を解く機会の提供、及び
学習ポイントを問題を解くことを通じて理解してもらうこと

○手法

学習ポイントに対応した問題を作成し、twitterに投稿。(2019後期から変更)
投票機能を用いて反応を見る。
「詳しい解き方を知りたければSLAへ！」とし、SLA利用を促進。

○成功点、反省点

twitterへの反応は多かった。
一方、挑戦状の問題に関連してSLAを利用した人はいなかった。

2020年度 後期

数学部会の活動報告

30秒で分かる！
2020年後期の数学部会

1. 利用傾向

- 前期は利用者少なめ、後期はちょっと多いくらい
- 質問内容は前年度とほぼ同じ
- 対応時のオンラインなりの工夫 & 部会内での共有

2. 広報活動

- twitter 等の広報活動はほぼノータッチ
- Tips 作成に対応以外の時間を費やした

1. 利用傾向

- 利用者：前期は少なめ

中島先生が
数学を受講する学部一年生に
周知してくれました！

後期は並-ちょっと多いくらい

- 利用内容：おおかた前年度と変わらず
  (教科書の問、webwork など)
- 前年度からの差異：1）留学生が韓国から参戦
  2）レポートの書き方に対する質問

1. 利用傾向

★ オンライン対応で工夫したこと

1. 「型」の意識
   … 45分を有効活用する為に「事前に問いを全て聞く」など
2. Classroom を用いた部会内での頻出質問の共有
   … オフライン時代のカルテチェック
3. 対応中の視点の共通化
   …こそあど言葉ではなく、「何ページ」などの具体的な指示
4. 渡辺くんのイケボ
   …デフォルトの美声からロボットボイスなど幅広く対応

2. 広報活動

★ メインでやってること

1. **書評**
   … (主に) 新入生向けに SLA がお勧めの教科書を紹介
   → SLA のホームページに掲載

2. **数学部会からの挑戦状**
   … twitter で数学の問題を出題
   SLA の広告と学びの場の提供

3. **Tips 作成**
   … 頻出質問の部会内での「処方箋」
   今年は本格的に作成に取り掛かる

3 化学部会

2020年度 前期

化学部会活動報告

報告内容

1. **前期を通した化学部会の活動に関して**
   - **1-1. 化学Aに関するポスターの作成**
   - **1-2. 化学Cに関するイベント内容の推敲**
2. **オンライン対応に関して**
3. **後期に向けての課題および引き継ぎ事項**

部会活動について

■中村企画

- 企画のブラッシュアップ
  - ☛ 問題点…オンラインで常設ダンジョンとして成り立つのか

■化学A

- 概要ポスターの改定・発信（Twitter）
- 新規 Twitter案
  - ☛ Basicな内容をTwitterで、Advancedな内容をブログで、、など
    ターゲットを分けて発信を予定 (仮)

オンライン対応の問題・改善点・コツ

■問題点

- 顔の見えない対応で理解度を図るのが難しい
- 学生にjamboardに書いてもらうのは難しい (環境が整っていない)
-

■改善点・コツ

- 学生がメモをとっているときには、
  「終わったら声かけてね」などと声掛けする
- リアクションはいつも以上に大きく！
- Jamboardに先に入り、付箋等で資料の添附を促す

後期に向けて

■引継ぎ事項

- 中村企画の成就 (常設ダンジョン化)
- 化学C Twitter完成
- 化学A Twitter & ブログ記事案作成 (来年度前期の発信を目指す)

1

2020年度後期 報告会資料
化学部会

Yuki Nakamura*, Mayu Nozawa*, Yuta Chiba, Suisui Mikami, *SLA Katudo Houkokukai*, **3**, 1-5 (2021).

※著者：中村(原案)、能沢(デザイン)　発表：千葉、すいすい

今期の活動内容 2

- Twitterの発信資料作成
  - → 初学者向け(すいすい)と上級者向け(千葉)に資料作成
  - **すいすい**：量子化学がどのように役に立っているのか
  - **千葉**：波動関数をベクトルとみなす。量子数と軌道の関係性
- 内部向けの資料作成
  - **能沢**：スライドのデザイン、作り方に関する内部資料作成
- 化学Cイベント（テーマ：共鳴）
  - **中村**：資料の手直し、ポスター製作、広告

対応の特徴 3

- 前半：レポートの書き方をよく聞かれた
  - 設問等の化学の専門的な内容だけでなく、**引用の書き方や考え方**について質問されることが多かった
  - ライティング的な対応が多めであった印象
- 後半：期末テスト対策
  - 例年より丸投げな学生は少なかった
  - 細かい単元について聞くのではなく、ある程度広い範囲を勉強してきた中での疑問点をいくつか持ってくることが多かった

活動の課題 4

- 対応が少ない、、、(n回目)
  - 自然科学総合実験の質問が多く、**化学に関する対応が少ない**
  - **学期末の駆け込み利用**が少なかった

化学部会の見解

- 学生側の問題:オンライン化で過去問が流通していない

  → 過去問は「分からない」に気づくきっかけになっていた？

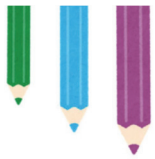
- SLA側の問題:予約が必要、ふらっと立ち寄りづらい

  → 手軽さが失われた&対応開始までSLA側の雰囲気が分からない

化学部会としての来期の活動方針 5

- 化学A:今期作成した資料を発信
  - 発展的な内容はブログへ
- 化学B:発信資料の作成
- その他の発信資料の作成
  - 化学Cの小ネタ
  - レポートの書き方講座
  - 身の回りにある化学紹介

4 ライティング部会



ライティング部会

SLA2020年度前期活動報告会
2020年8月12日（水）

1

今期の傾向

《主な利用者》	《対応内容》
・学部１年生（日本人）	典型的なレポート 多 英語のレポートも対応
・修士１年生（留学生）	主には日本語チェック 専門的なレポートの登場

◆対応で意識したこと→コロナ状況下への配慮

内容に関するディスカッション、オンライン授業の感想共有、授業の内容や先生の雰囲気の共有、資料へのアクセス、検索方法の提示、別の学内サービスの提案、雑談多め、話しやすい雰囲気

2

成果①身についたスキル

◆Google ドキュメントスキル

共同編集、画面共有

認識ミスの減少

修正のしやすさ

◆対応内容充実スキル

学生からの質問＋α

対応後のフォロー✉

◆対応円滑化スキル

45分時間配分・優先順付け

予告・実況中継

オンラインと手を組んだおかげ！
ライティングはオンラインと
相性がいい！

成果②対応に関連して…

◆対応充実に注力、対応事例の蓄積

対応カルテの充実

ピアレビュー、セルフレビュー

◆分析データの活用

昨年度、対応後に授業で提出されたレポートを対象に、

対応で伝わりやすい点・伝わりにくい点について分析。

→分析データから得られた知見を、実際の対応に活かす。

例）修正点の優先順付けとその説明・汎用性のある教え方を意識

今後の課題

◆ライティング部会内での対応の標準化

学生との電子データのやり取り方法

対応の手順

◆対応種別マニュアル作成

対応の蓄積を活かす

後進への引継ぎを意識

他部会にも還元できるように！

ライティング部会

SLA2020年度後期活動報告会
2021年3月1日（月）

1

今期の傾向

◆主な利用者

・ほとんどが留学生

博士課程前期1年・研究生

N1相当

リピーターが多かった

・まれに学部1年生

◆主な対応内容

・授業の課題
（ミニッツペーパー）

・レポート課題

・研究計画書
（院試・奨学金の申請書）

・院試の過去問

・修士論文

前期からの変化

◆メンバーの増加　2人↗4人

2人/日シフト・各シフトで振り返りの時間

記憶があるうちに対応で困った点を解決できる

◆対応時間 45分↗60分

対応のニーズや授業の雰囲気を聞き取る時間がある

つまづく所が何個かあっても説明時間に余裕がある

区切りのいい所で改めて疑問に思う点がないか確認する余裕がある

クロージングでポイントをまとめる時間、伝える時間に余裕がある

オンライン対応の振り返り

◆ メリット

Googleドキュメント共同編集・画面共有

→マーカー機能による視覚の共有ができる

→修正がしやすい

文字によるコミュニケーション増

→認識ミスの減少

→留学生が理解しやすい

対応後のフォロー✉

→学生からの質問＋α

予約制

時間配分・優先順付けの意識

予告・実況中継の意識

◆デメリット

非言語的コミュニケーションの不足

→学生のリアクションがわかりにくい

→顔より文章を見ている時間が長い

図示による説明がやりにくい

→全体の構成の説明がやりにくい

（日本人学生の満足度が低いかも）

ライティングはオンラインとの相性が良い。対面が再開した場合も、視覚を共有する、やりとりを文字で残す、修正の優先順位をつける、作業工程を伝える、学生からの質問＋α を説明する意識を持つようにしたい。

部会活動①

◆対応の標準化

模擬対応

→新メンバーにとっては話しかけ方や進め方が参考になった

→もともといるメンバーは学生側だと割と緊張することが分かった

→アイスブレイクがない分、新しい利用者さんには緊張がほぐれるような雑談を意識したほうが良いかも

サンプルレポートを4人で添削

→チェックが必要な箇所と、修正の優先順位の共有

→修正パターンが複数考えられる場合の修正パターンの検討

各シフトごとでの振り返りの蓄積

→各シフトは新メンバーともともといるメンバーがペア

→カルテと同じように入力フォームを作成

2021年度以降の新ライティング部会SLAに向けたTips作成

→新メンバーにとって特に役に立ったことを忘れないうちにまとめてもらった

5

部会活動②

◆資料作成

SLAガイドブックの作成・見直し

広報用ポスター案の作成

学部生に重要性を知ってもらうには？

レポート診断・レポート執筆のチェックリストの発想

執筆後提出前だけではなく、執筆前や評価が出た後の利用？

今後の課題①

◆留学生・リピーターへの対応充実のために

日本語チェックだけでなく他の観点を提供する意識

リピーターに対してのお土産の検討

できるようになった箇所、よく間違えるパターンなどのまとめ
一歩先の書き方・日本語表現の紹介
（文法、文章の階層化、並列方法など）
情報の収集方法

SLA間の情報共有方法の改善

曜日が異なるSLA間でも月30分くらいの情報共有の場を作る
Google school…確認するコンテンツの優先順位を決める
カルテの書き方も標準化する

今後の課題②

◆新しい利用者層の獲得のために

ライティングの重要性の発信

構想段階の相談やレポート以外の利用の宣伝

（⇔留学生以外は提出前のレポートが圧倒的に多い）

対応形式の多様化

複数人の利用を宣伝
ふらっと来られる対面の対応を一部再開？

イベント実施

どんなSLAがいるか知ってもらう必要がある
テーマの段階で持ち寄って話す場をつくる？
1年生に出ているレポートのテーマリストを作成する？

8

5 英語部会

Contents

- 今期のまとめ
- 課題
- 来期の活動

2

今期のまとめ

1 学生の利用傾向

- 例年より利用者層が広くなった
- 1on1の予約が埋まりやすかった

2 発信について

- Twitterでの週2回程度

3

今期の課題

1 英語ライティングの対応について

- 申請書類の対応について
- 構成はライティングに見てもらい，文法，表現を中心に添削

2 参加者同士の交流の場の提供

- カフェの利用が少なかったため，学生が参加を促す取り組み

4

来期に向けて

1 基本的に1on1対応

- マンネリ化しないようなアクティビティー開発

2 英語体験ウィークを開催する

- テーマを絞った英会話企画
- 各SLAがMeetの部屋を立てて，入退室自由な形で

5

内容

1. 今期の振り返り
   - 1.1. 利用系統
   - 1.2. アクティビティ
   - 1.3. 発信
2. 課題
3. 来季の目標

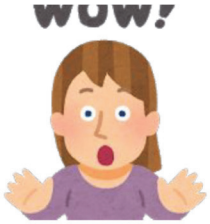
1.1. 利用傾向

- 半分学部生・半分院生
- オンラインで他キャンパスの利用が増えた
- リピーターについて、2回利用してくれる人は多いが、それ以上は少ない
- 延長戦(2月活動)

  9割強埋まっていた

- TOEFLやIELTSなどのアカデミックな英語試験対策の需要増

1.2. アクティビティ



- 体験ウィーク（参加者32人）
  半分留学生/半分日本人学生
  全体的には好評で，他の学生との交流の場を提供(新年会の布石)
- 新年会（参加者7人）
  メインターゲットの中級レベルの学生が全くこなかった
  レベルの分け方に苦戦
- 春の合同自主トレ（参加者21人）
  英会話に参加しずらい学生にSLA英会話のアピール(定期化?)

1.3. 発信

- Twitter
  フォロワー数60人→116人
  →ツイッター更新頻度を高めたことで，フォロワー数増
  SLA英会話に参加してもらえた(広告効果)
  質問箱(質問三つ)
  オンライン上で少しずつ学生との交流の和を深めたい

2. 今後の課題

- 利用傾向
  リピーターについて、アカデミックな英語試験対策の対応
- アクティビティー
  利用者同士のコミュニケーションの場
- 発信
  Twitterのネタ切れ

3. 来期の目標

- 利用傾向

  利用者を下の名前で読んだり、再参加を活動内で呼び掛ける(親近感構築)

  (対面カフェが可能なら)利用者同士の関係づくりを支援する

  アカデミック英語試験対策マニュアルを作成

- アクティビティー

  イベントの時期を再考(テスト期間にかぶらないように)

  可能であれば対面カフェも再開

- 発信

  曜日担当SLAがTweet案を予約投稿

7

6 日本語部会

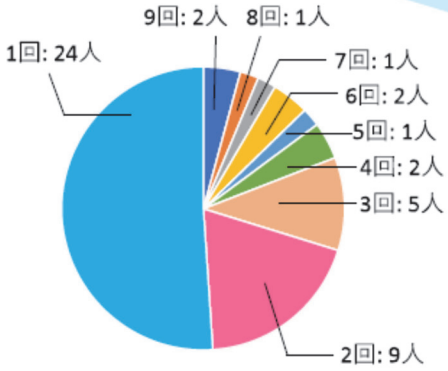
2020年度
日本語会話前期活動報告

日本語SLA：鏡耀子　松谷凌雅　高山翔園　野崎舜介

利用状況

・対応件数：115件／153枠
・利用者数：47人

・学務情報システムで知ったという利用者が多数



・半数がリピーター
・出身はほとんどの人が中国、その他エジプト、フランス、シリア等が若干名
・上級者が多いが、学務情報で広報を行うと初級者の利用が増える傾向にある

セッションの内容

《基本の流れ》
①自己紹介
②要望や普段の状況などのヒアリング
③会話練習など
④振り返り（間違いや疑問点などの確認）

・言い間違いがあった場合にはチャットを使って指摘する
・主に日常会話練習を行ったが、面接や学会発表の練習、ESや日記などの添削を行うこともあった

良かった点・改善点

《良かった点》
・利用者のニーズに臨機応変に対応できた
・質問に柔軟に対応できた
・楽しむことと学習することを両立できるよう工夫した

《改善点》
・利用者に特定のニーズがない場合、何をすべきか迷ったり会話が途切れたりしてしまうことがあった
・初級者への対応が難しかった
・「文章の日本語チェックをしてほしい」というライティング系のニーズに応えるための工夫が必要

後期に向けて行うこと

①資料の共有と整理
・よくある質問とその回答例や、ネタ切れ時に使える資料を集めて共有する
・索引を用意して必要なときにすぐ見られるようにする
②初級者への対応カリキュラムの作成
・初級者への対応の仕方や、使えそうなコンテンツをまとめておく
・詳細は9月に改めて検討
③セッション外でのライティング添削の開始
・Google Formで100〜500字程度の文章を書いてもらい、SLAが日本語チェックをして返却する→予約無しで気軽に利用できる
・夏休み中に試験的に実施し、後期から本格的に運用することを目指す

2020年度
日本語SLA後期活動報告

日本語SLA: 鏡耀子　松谷凌雅　高山翔園
野崎舜介　小川晴生　江村玲

利用状況

①中～上級者（N2～N1相当）が多数
多くの場合日本語のみでコミュニケーションが可能。前期に比べて初級者が減った印象（予約のハードルの高さが原因？）。

②「日常会話の練習がしたい」という利用者が多い
基本的な会話ができる利用者が多く、研究や日々の生活についての話をすることが多い。雑談で終止しないよう、チャットを使った修正などを意識。授業で分からなかった箇所についての質問、インターンや就活の面接練習、奨学金の申請書チェックなどもある。リピーターの場合、前回の学習箇所の復習も行う。

③学年・専門は多様
特定の学年や学部に集中せず様々な学生が来てくれた。出身国は中国がほとんどで、中には中国からのアクセスもあった。ただしFGLの学生の利用はなかった。

④ライティング添削サービスを開始
Googleフォームを使用しセッション外での添削サービスを開始。しかし利用者はさほど多くなく、また来期は日本語SLAが減ってしまうため受け入れ体制に不安が残る。ライティング部会とも連携し運用の工夫が必要。

＊対応外の作業：
留学生向けパンフレットの作成、教材準備（特に初級者向け）、過去のカルテの確認など。

良かった点

①前年度の目標を達成できた。
・前年度の目標は、1on1の実施、個人カルテの改善、資料共有のポータル作成、他部会との情報共有だった。

②オンラインの対応を改善した。
・前期に資料を作成→Classroomで共有、ポータルで管理した。
・チャットを使って文字化すると復習がしやすかった。
・事前準備（メールの送信やカルテの確認）をスムーズに行えるようになった。
・表情が見えにくいので身振り手振りを使うようにした。

③リピーターの利用者には長期的な成長を促した。
・ペアのSLAと得意不得意を考慮して担当の利用者を決めた。
・担当の利用者を決めて何度も同じ人を対応することで、利用者ごとの特徴を把握し、その人にあった対応をすることができた。
・次に来たときは、前回の復習を行った。

④広報により新規の利用者を増やした。
・学務のメールが一番効果的だった。

課題点と対策

①補助資料の活用方法が十分に共有されていない。
・対応補助資料の活用方法がSLA間で共有されておらず、セッションで活用する機会が少なかった。
・対策: 共有のタイミングで活用事例を話す、資料活用法研究会を実施する

②上級者のマンネリ化対策が今後必要になる。
・上級レベルの留学生とは補助資料を活用せずともセッションを進行させることはできるが、徐々にセッションの内容がマンネリ化し、上級者にとっての新しい学びがなくなっていってしまう。
・対策: 留学生の今後に合わせてSLA側から新しいアクティビティを提案する。

③次回対応への引き継ぎ不足が散見された。
・複数の曜日に申し込む留学生のカルテにおいて、前回対応時に何をやったのかが正確に記入されておらず、他SLAとの情報共有がうまくいかないことがあった。
・対策: カルテの項目に「引き継ぎ事項」を追加する。

④ビデオリフレクションができなかった。
・毎回の対応が満員だったこと、空き時間にやる作業が多かったことから、自身や他のSLAの対応を振り返ることができなかった。

オンライン対応のTips

○資料の整理・共有の工夫

・オンラインのメリットである、資料を利用者やSLAメンバーと共有しやすいという点を活かす。作成した資料をクラスームで共有するだけでなく、ポータルなどを作成しひとつにまとめることで、アクセスしやすくするとよい。

・カルテには他のSLAへの引継ぎ事項を含め丁寧に記入し、リピート利用者への対応に活かす。
（引継ぎ例：「新しく覚えた表現を次回復習してください」「過去形を使うのが苦手なようなので、注意して対応してください」など）

日本語部会で作成した資料 &ポータルの例 ➡
資料のタイトルとURLを併記することで、対応中でも探しやすく、開きやすくした。

○対応中

・**初級者対応マニュアル**（各位、自分の担当箇所忘れず！）
https://docs.google.com/document/d/1fxudJG3uahfYBtePus6o A8FXsg2-O1OIUcDndJ5Mtg/edit?usp=sharing

・**対応ネタなど**
（日本語オノマトペ）
https://drive.google.com/open?id=1beq8lnHpCOYAd0M9K-B5CP3HD77SuaXx&authuser=0

（会話のネタ帳）https://drive.google.com/open?id=1-6s8lEK3Hd7W0SCQb0r0ELlJGy9 xXpbSgSobfPKviw&authuser=0

（日本の鍋料理）
https://drive.google.com/open?id=1lk0QvmZOznqrHorYruS d6kegWIuvIGd&authuser=0

（料理の日本語）
https://drive.google.com/open?id=1X-POw6-dBOTrvlfhAAF-uirbva m9srFZK0xOKIjPjk&authuser=0

・**敬語に関して**
（youtubeなど）
https://drive.google.com/open?id=1lN0eBxKnyuOprSeI63J3t0FM VqC7C0NF0v-kVpUS4g&authuser=0

○感情表現の工夫

・画面越しでは表情が分かりにくい。
➡身振り手振りまで入るように自分を引き気味に映すことで、こちらの感情がより伝わるように心掛けた。

・笑顔！！
利用者の緊張も和らぐ。

来期に向けて

利用のステップ

入口
利用していない人へのアプローチ

認知拡大＋利用のハードルを下げていく

①SNSの運用
・他部会を参考に、具体的コンテンツや運営方法を話し合う
・タスク分担を行い、運用開始

継続
利用中の人へのアプローチ

対応の質を上げていく

対応中の対策：**②対応チェックリストの作成**
・セッションの始めや最後に利用者へ確認する事項をフォーマットとして統一
・チェックリストかして、セッションの度に確認できるようにする

対応外での対策：**③対応リフレクションの時間の確保**
・対応のない時間、シフト外などで積極的に自分や他の SLAの対応を見直すようにする

メンバーの連携強化：**④カルテの見直し**
・不必要な項目、内容に被りのある項目を削除
・新たに「引継ぎ事項」の項目を追加、引き継ぐ内容を明確化 →2月シフトから試験的に実施中

出口
上級リピーターへのアプローチ

SLAを卒業し自立するできるようサポートする

⑤カフェ形式のイベントの提供
・複数人の留学生と日本人学生が、よりレベルの高いテーマで話し合える企画を検討
・考えるソファへの参加も促す

7 企画部会

今期の活動状況

（渡辺楓）

① かんがえるソファプレ企画「かんがえるCafe」

新入生向けの企画として、４月に計６回開催しました

② かんがえるソファ

５月に計３回、６月に計４回、７月に計３回、
合計で１０回の考えるソファを開催しました

オンライン上の企画がメインだったため、
今期は上記以外の企画を開催しませんでした

今期の傾向

（飯田司）

昨年度＝オフライン開催

今期＝オンライン開催

対話の場としての「かんがえるソファ」
SLAによるファシリ
高知大学との交流

ファシリ・グラフィック
90分開催
ほぼ一つの場での話し合い
授業からの参加者多数

ファシリ・バックファシリ
75分開催
ルームを分ける
参加者の多様化・高リピート率を維持
新規メンバーによるファシリ

成果

（須田華）

① **参加者数＝延べ１２２名**（うち２４名はかんがえるcafé）
→オンライン開催によって
①気軽に参加できるようになった（リピーターも増加）
②他キャンパスの人も参加しやすくなった

② **参加者アンケート**（1~5点、時間の長さは3点が適切、満足度は100点満点）

項目	期待した内容	発言の機会	司会の進め方	時間の長さ	満足度
平均	3.79	4.41	4.16	3.26	86.15
回答数	70	69	70	70	68

③ **今期の活動で得られた成果**

・ファシリテーションの仕方、型を模索することができた

・オンライン開催をする上で気をつけるべきこと
（アイスブレイクの方法、話の振り方など）を認識できた

・他大学（高知大）と共同開催を行い、東北大学内のみに留まらない交流を持つことができた

参加者層（学年）

課題

（坂本瑞生）

① ファシリテーションに関する事項

・参加者のぎこちなさ（アイスブレイクが不十分）

・対話の停滞（問いかけや要約のスキル不足）

・参加者同士の対話が不活発

・企画目的や方法（Tipsを含む）が言語化・共有できていない

② 企画運営に関する技術的事項

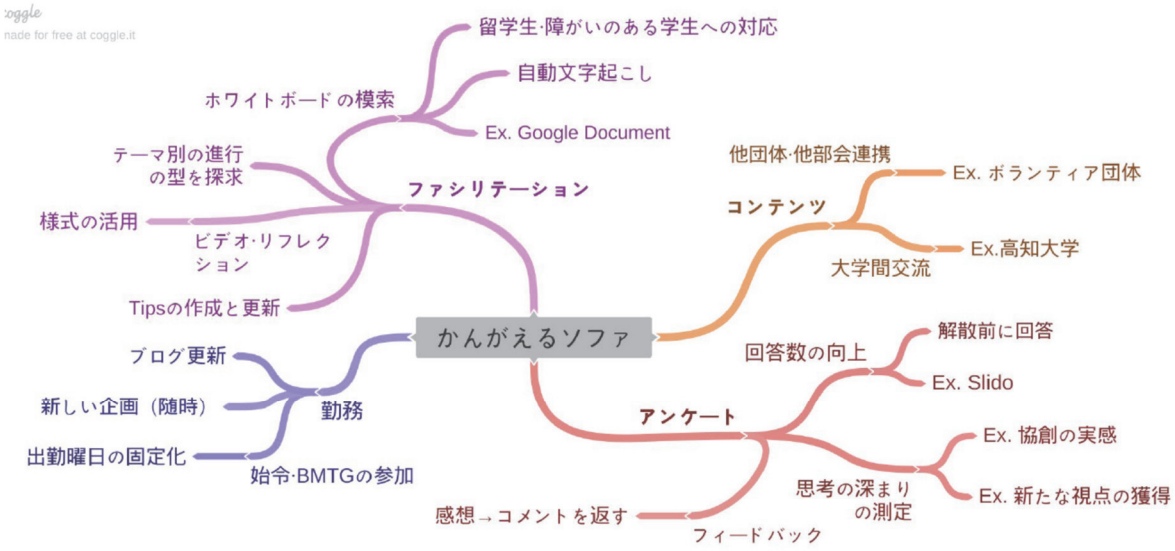
・グラフィック（グラフィックの有無、活用ツールの検討）

・企画後の振り返りにおける評価基準が不明瞭

（企画目的の言語化・アンケートの活用が不十分）

来期に向けて

（西塚孝平）



かんがえるソファ（哲学対話）とは

★ 目的 （2017年6月～）

普段考えることのない「当たり前」や「常識」を問い直し、
仲間の考えや経験を受容しながらじっくりと向き合い考える

★ 内容

参加者による対話 ≠ 議論・討論

活動① かんがえるCafé（プレ企画）

学部1年生を対象に、1時間の「雑談会」をオンラインで6回実施

- オンライン開催の模索（長所・短所の発見など）
- ファシリテーション（運営）の練習
- テーマ例）大学での学びのイメージって？何か不安なことはある？

日にち	イベント	参加数
4月17日（金）	ミーティング（キックオフ）	
4月20日（月）	第1回　かんがえるCafé	5
4月20日（月）	第2回　かんがえるCafé	5
4月20日（月）	第3回　かんがえるCafé	3
4月22日（水）	第4回　かんがえるCafé	4
4月24日（金）	ミーティング（4月定期）	
4月27日（月）	第5回　かんがえるCafé	4
4月30日（木）	第6回　かんがえるCafe	3

活動② かんがえるソファ on Zoom

日にち	テーマ	参加数	グループ	時間
5月13日（水）	第1回：今年のGW、本当は何をしたかった？	14	1	60分 時間変則
5月22日（金）	第2回：オンライン授業、やってみてどう？	17	2	
5月25日（月）	第3回：専門ってなに？	9	2	
5月29日（金）	ミーティング（5月定例）			
6月5日（金）	第4回：サークルってやる必要ある？	7	2	75分 16:30-17:45
6月10日（水）	第5回：第二外国語って必要？	6	2	
6月15日（月）	第6回：幸せってなに？	6	2	
6月19日（金）	ミーティング（6月定例）			
6月23日（火）	第7回：どうして人はつながりを求めるの？	5	2	75分 16:30-17:45
7月3日（金）	第8回：普通ってなに？（通算50回目）	6	1	
7月8日（水）	第9回：自由とは？	15	3	
7月14日（火）	第10回：優しさってなんだろう？	13	2	
8月4日（火）	ミーティング（7月定例）			
8月5日（水）	ファシリテーション研修（高知大学合同）			

当日のタイムテーブル

目次・概要　（高野）

目次

1. 今期の活動状況（渡辺）
2. かんがえるソファの概要（飯田）
3. かんがえるソファの成果（坂本）
4. 今後の課題（須田）
5. 来期に向けて（西塚）

報告の概要

- 2020年度全体での参加者数は延べ**203名**（2018年度は88名、2019年度は123名）
- アンケートでは高い満足度を得られた（平均86/100点　n=191）
- ファシリテーション技術の形式知化に課題
- 新企画を構想中

1. 今期の活動状況 （渡辺）

1. かんがえるソファ

対話を通して身近なテーマについて考えを深めていく企画。前期同様、基本的にはオンライン上での実践だったが、後期は対面での実践を1回だけ取り入れた。かんがえるソファの活動状況の詳細については後のスライドで説明。

2. 新企画を構想

企画部会の須田が美術関連企画を、渡辺が音楽関連企画を構想した。各々の構想した企画の概略は以下のようなものである。

須田：オンラインでの開催を検討。参加者の方々にはあらかじめ季節感の感じられるものを様々な形（例えば、写真、絵、文章、俳句、詩など）で持ち寄ってもらい、それをオンライン上で共有する。それをもとにしてアートをつくるというもの。どのようなアートを作るかは検討中である。

渡辺：コロナの状況次第だが、対面での開催を検討。各回についてテーマを定め、それについて音楽を利用して新たな視点を提供する。その後、提供した視点をお題にした簡単なワークショップを実践。

いずれの企画も構想の段階でとどまっており、企画の実現には至っていない。

2. かんがえるソファ（哲学対話）とは （飯田）

SLAのファシリテーションのもと、
参加者が身近なテーマについて話し合い、深めていく場
（今年度は主にオンライン／今期は90分開催）

かんがえるソファ ＝ 議論ではなく、「対話」

身近な「あたりまえ」に対する疑問

自分なりに考え、表現する力／自信

異なる視座に対する気づき

自身の価値観・世界観の変容

後期かんがえるソファの活動概要

開催日	テーマ	参加者数	司会係	記録係
10月22日（水）	主体性ってなに？	6	渡辺	高野
10月29日（木）	成長するってどういうこと？	8	坂本	飯田
11月5日（木）	ミーティング（10月定例）			
11月13日（金）	挫折ってしたことある？	7	高野	須田
11月19日（木）	すごい人ってどんな人？	10	西塚	須田
11月27日（金）	孤独についてかんがえる(対面開催)	8	飯田	須田
12月1日（火）	ミーティング（11月定例）			
12月3日（木）	青春ってなに？	4	西塚	渡辺
12月11日（木）	自分らしさってなに？	5	須田	高野
12月14日（金）	愛するってどういうこと？	5	西塚	飯田
12月22日（火）	あなたは大人ですか？	6	高野	渡辺
12月24日（木）	ミーティング（12月定例）			
1月8日（金）	伝統についてかんがえる	5	須田	西塚
1月13日（水）	コミュ力って何？	8	坂本	渡辺
1月19日（火）	平和って何だろう？	6	渡辺	高野
1月25日（月）	どこからタメロ？	3	佐藤先生	西塚
2月11日（木）	ミーティング（1月定例・後期振り返り）			

当日のタイムテーブル

告知ポスター（2021年1月）

3. 成果

（坂本）

1. 後期の参加者数＝延べ81名

- 前期の参加者数は延べ122名 ※新入生向け企画「かんがえるカフェ」の参加者を含む
- 前期と後期の人数を合わせると、2020年度全体での参加者数は延べ203名

2. 参加者アンケート（1~5点、時間の長さは3点が適切（前期）、満足度は100点満点）

【前期・後期共通の質問項目】

項目	期待した内容	発言の機会	司会の進め方	時間の長さ	満足度
平均（前期）	3.79	4.41	4.16	3.26	86.15
回答数（前期）	70	69	70	70	68
平均（後期）	4.17	4.45	4.27	4.23	85.47
回答数（後期）	51	51	51	51	51
平均（通年）	3.98	4.43	4.21	3.74	85.81
回答数（通年）	121	120	121	121	191

【後期から追加した質問項目】

項目	新しい見方・考え方を得ることができた	自分の考えが変わった	テーマについて、じっくり考えられた	考えたことが、今後の生活で役立つと思う
平均	4.52	4.15	4.52	4.21
回答数	51	51	51	51

4. 課題

（須田）

●かんがえるソファの課題

1. ファシリテーション技術の課題

・参加者の発言をより引き出すための工夫が必要

ex)話していない人に振ってみる。発言に対してなるべく同じくらいの分量のコメントを返す。

・発言を深掘りする工夫

ex)発言に対する感想＋《対立意見の提案 / 前の発言者と比較・構造化を図る》などをする。

2. アイスブレイクの課題

・なんとなくアイスブレイクを設定するのではなく、目的を明確にし、必要な要素を認識する。

ex)目的：自分の考えを話しても大丈夫だ、受け止めてもらえるという安心感を生み出す。

→必要な要素：

自己開示を伴うエピソードトーク、ファシリテーターや他の参加者が発言を受け止める姿勢

（発言に対するコメント、前の発言者の話にコメントをする、など）

3. 達成目標の言語化と共有

・ファシリテーション技術は各自の経験知によって支えられているところも大きい

→かんがえるソファの目的、身に付けてほしい力、企画部会に求められる達成事項と役割を整理・共有し、新メンバーにも共有できる体制が必要

●企画部会としての課題

かんがえるソファ以外の活動の実施

・今年度はオンラインでできるということでかんがえるソファのみの運営からスタートし、後期もそのままかんがえるソファの運営のみに留まり、他の活動はほとんどできなかった。

→現在構想中の2つの新企画について、「学びを創る」という理念を基に、来年度以降実施の段階にまで引き上げていきたい

5. 来期に向けて （西塚）

1. かんがえるソファの充実

・ファシリテーション・スキルの向上

→目的や企画部会の役割を見出す（達成目標の形式知化と共有）には、部会内の話し合い（理論知ベース）だけでなく、日々の実践から体得していく身体知・実践知の視点も大切にする

ex）ファシリテーションのビデオ・リフレクションとその仕組みづくり / **イベント終了直後の振り返り**で、成功場面と失敗場面の抽出・記録 / Tips（成功のコツ）の **継続かつ頻繁な**加筆修正と閲覧

・月ごとに共通テーマを設定

→広報に統一性をもたせる、イベント間のつながりを作る　ex）4月：大学の学び、5月：感情…

・活動ブログの整備（https://kikakuslatohoku.wixsite.com/sla-project/blank ）

ex）ファシリテーターの振り返りを掲載（今期）、開催テーマ一覧表作成、レイアウト見直し

2.「活動を創り出す活動」の実装

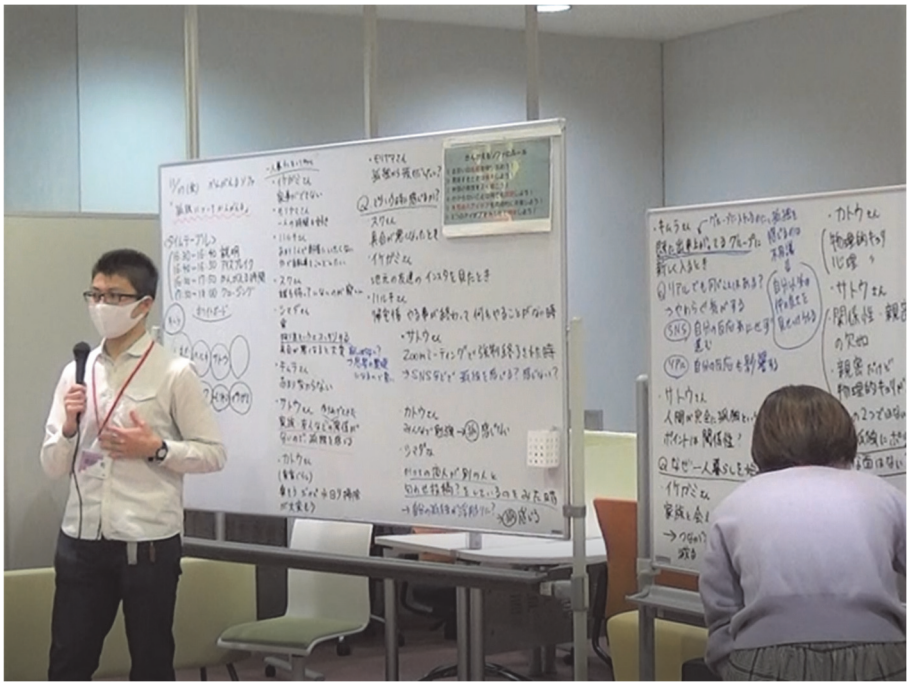
・かんがえるソファ以外の2つの新企画を実現

・学生の声に基づく企画や、かんがえるソファのテーマ設定

ex）大学生だからこそできることって？なぜ英語が必要なのか？科学とどう付き合えば良いの？技術とは何か？お気に入りの映画や書籍を語り合う会をやってみてはどうか…

・学生と企画部会の距離を近づける（検討事項）

ex）学生（学部1、2年生も含める）がファシリテーターやイベント企画をする側に立ち、企画部会は彼らの活動を支援するという役割になる



5. SLA による活動振り返りレポート

企画部会を企画する：2017 年度「企画部会活動報告」続貂

文学部英語学専修　4 年
SLA 企画担当　坂本　瑞生

１．はじめに

「[...]様々な活動をやっていくなかで[...]これらの活動の目的を定義しきれていなことに気付き始めていた。また、企画のそれぞれが発案者を中心として人に依存した運営がなされており、運営方法や企画のねらいなどについて言葉に落とし込み切れていないところがあった。SLA は平均 1 ,2 年で入れ替わりがあるので、そのたびに企画の目的意識を新メンバーに共有していく必要が出てきてしまう。」(槙田 2018: 85)

この文章を読んだとき、興奮とやるせなさが同時に押し寄せてきたことを覚えている。私自身の思いを代弁するかのような記述を見つけた喜びと、「この当時から、企画部会はどれほど進展をしてきたのだろうか」という疑念のためである。

これは、2017 年度の学習支援センター年報に掲載された、当時の企画部会活動報告の冒頭である。そこでは、当時の企画 SLA が企画部会に対して抱いていた危惧と、それに対してとった当時の対応の成果がまとめられている。この文章を読んで私が我が意を得たりと感じたと言うことは、決して喜ばしいことではない。むしろ、この当時の課題が今も残っている、あるいは甦ってしまったことを意味している。SLA を去る前に、私自身が感じた企画部会の課題と今後進むべき道の１つ（の可能性）を書き残しておくことを最後の仕事と思い、筆に代わりノートパソコンに向き合う次第である。

２．企画部会への不満／課題

企画部会の活動は学ぶところが多く、実りのある良い時間を過ごさせてもらった。特にファシリテーションの経験は、その後、自分自身の専門の勉強会を主宰・参加するときに大いに役立った。その一方で、正直に言って、企画 SLA の活動に対しては不満を抱き続けてもきた。その不満は「言語化の欠如」の一点に集約される。

例を挙げよう。（今年度の）企画 SLA は月単位で活動の詳細について会議をした。したがって、1 か月単位で活動のルーティーンが生じる。月末に翌月に向けた会議。シフト＝企画開催日の決定。シフト表の記入。企画の広報。企画運営（勤務）。事後の振り返り。勤務報告の提出。ブログでの活動報告。そして月末の会議で活動の振り返りと翌月の活動に向けたミーティング。特に企画部会は不規則なスケジュールで活動するため、この一連のルーティーンをうまく理解して活動しなければ、自分自身の to do リストを把握することさえままならない。しかし、内部の活動は習うより慣れろの空気がある。私個人の能力不足も相まって、企画部会の月単位の動きを把握するのにはじめの 2 か月ほどを要した。

事務的な面は比較的容易に改善が望めるだろう（今書き残した記録だけでも十分に改善に資すると思われる）。しかし、企画運営の実質的部分においてはそうもいかない。まず、企画の運営主旨が

分からない。今年度の企画部会は「かんがえるソファ」という哲学カフェ企画の運営を行ってきたが、この企画の目指すところが分からない。振り返りのミーティングでは「(参加者の) 思考の深まり」という言葉が多用されたが、何をもって思考が深まったとしているのかということが不明瞭であったし、時折、この点についての認識のズレがミーティングを混乱させているように見受けられる場面もあった。また「哲学的」という言葉もよく用いられたが、その意味する事柄も明らかではない (そもそも、今年度の企画 SLA に哲学を専門とする人間はいない)。私見では、かんがえるソファは「哲学」カフェではない。あくまで「かんがえる」場だろうと思う。そして、それでよいだろうと思われる。不用意に、定義不明な素人哲学を掲げ重視する必要性は無いのではないか。

企画主旨が不明瞭であることは様々な実害をもたらす。第一に、活動結果の評価ができない。目標が不明瞭なのだから当然である。評価基準無くして、活動結果の評価など出来るわけがない。第二に、ミーティングの時間を必要以上に消費する。各 SLA がそれぞれに「かんがえるソファ」に対する (いくぶん不明瞭な) イメージを持って会議に臨むため、相互の言葉選びや想像している状況に齟齬が生じる。したがって、相互理解のために必要となるコストが不必要に増える。こうした時間浪費は、他の事項の検討を行う時間を奪い、企画部会の活動を停滞させる。

言語化された目標設定の不在はミーティングの迷走も促す。「今、何を検討すべきか」が共有されていないために、誰かしらが口にしたアイディアが無条件に採用され山積みになっていくような場面が多々あった。ブレインストーミングは良いにしても、それは浮かんだアイディアを後から比較検討するためであって、すべて飲み込むものではない。しかし、比較検討の番は来ない。アイディアを検討するための「物差し」がないのである。

3.「習うより慣れろ」ではなぜいけないのか

こうした「言語化の欠如」も、故無しというわけではない。むしろ、合理的といい得る側面もある。(後述するように) 企画部会は学習者に新しい学習像を提示したり、新たな学びの機会を創出することに主眼を置いている側面がある。また、主として文系支援を意図して設立されたという背景も影響しているだろう。(いわゆる) 理系学問と比べて、文系学問は方法論として許される範囲が広い傾向にある。こうした企画部会の位置づけは、活動目標や内容を固定化することとはそぐわない。新たなものを生み出すにあたって、言語化された≒固定化された活動目標は足枷となる危険性をはらむ。こうした考えのもとに「習うより慣れろ」の精神で新人 SLA を教育し、活動を続けていこうという方針を (自覚的であるにせよ、そうでないにせよ) 採用することは理解できないわけではない。

しかし、それは言語化された活動目標を静的に捉えた場合にのみ生じる危惧である。言語化された内容をあくまで「暫定的な目標」と捉え、活動の中で活動目標を見返し、修正・精密化を施していく。そうした動的過程を意図するならば、むしろ言語化は重要な手続きであるはずだろう。なぜならば、SLA 間に「明示的に共有された (暫定的な) 活動目標」がなければ、それについて同じ土俵で議論をすることはできないからである。異なる SLA が、共通の物差しの中で活動を振り返るためには、言語化された活動目標が不可欠である。そして、これは物差し自体の妥当性を疑うという営みを決して否定しない。こうした動的過程は (文理を越えた) 学問一般によく見られる手続きであるし、かんがえるソファの参加者が経験する (してほしい) 思考過程でもある。そうした手続きを企画 SLA 自身が避けるべき理由はない。

4. 企画部会をより良く企画するために

ここまで、思いつくままに企画部会が抱えていると思われる問題を指摘してきた。その根幹に「言語化」の軽視があることは恐らく間違いない。であるならば、企画部会の行く先について、何かしら参考になりそうな事柄をここに言語化して書き残すことが筋だろう。

そこで、企画部会が何を目的とした部会なのかという点について言語化を試みてみよう。これには、過去に学習支援センターから出た発行物内の記述が参考になる。まず、佐藤(2016)の

記述を検討しよう。内容の要点をまとめると、企画部会の設立当初に意図されていた企画部会のミッションは以下のようにまとめられよう。

(a)授業外・授業以外の学習機会の創出
(b)文系学生支援の拡充
(c)学部を越えた学生間の交流促進
(d)教養教育の意義の伝達・意識づけ

加えて、足立(2018)には、次のような記述が見られる。「[企画発信型支援]は、質問を待つ形ではなく、こちらから学習（支援）の機会を提供する大小さまざまな企画提案型の支援形態で、ニーズ創出型の支援です。」（足立 2018: 6)。「最も新しい領域は企画担当です。これは、学習イベント等を実施し授業の枠にとらわれない『学びを創る』支援を行うものです。」（ibid.: 8)。これらの記述からキーワードを抜き出すとするならば、以下のものが特に重要だろう。

(e)ニーズ創出型／「学びを創る」

これらのキーワードを得ることで、例えば次のような事柄が疑問として生じてくるはずである。

(Q-1)授業内の学びの実態はどのようなものか。そこで得られない「授業外の学び」とは何を意図しているのか。
(Q-2)「文系学生」の学習実態はどのようなものか。なぜ支援が必要なのか。文系支援が踏まえておくべき、文系学問の特質はどのようなものか。
(Q-3)専門教育とは異なる、教養教育の特性や意義とはどのようなものか。
(Q-4)学習支援における、学習者の「ニーズ」とは何か。それはどのようにして理解し得るか。ニーズを「創出」するとはどのような行為か。

これらの問いに向き合い、不完全ながら言語化を試み、その言語化を常に批判的に再検討することで修正・精密化を施す。そのサイクル無くして企画部会の活動を「より良く企画する」ことはできないのではないだろうか。

５．企画部会の意義

ここまで、企画部会が現状抱えている（と思われる）課題として「言語化」を指摘してきた。そして、特に活動目標の言語化に問題の焦点を当て、過去の刊行物の記述を参照しながら今後の企画部会が考えていくべき課題の一例を言語化した。いくぶん容赦のない書きぶりになってしまったかもしれない。けれど、それは決して企画部会憎しという思いに起因するわけではない。そのことを最後に断っておきたい。

そもそも、企画部会が抱えている課題の根は、部会の文化と構造にある。それは決して属人的なものではない。言語化を試みる機会をいかに作ることができるか、それをいかに（個人ではなく）組織のレベルで浸透させていけるのかということが問題なのである。そして、言語化という文化を浸透させ、改善を試みる労力を払うだけの価値と意義が、企画部会にはある。

企画部会の提供する企画は、その運営の仕方１つで様々な可能性を秘めている。学部生同士がつながる機会としては、サークル活動などがすぐに思い浮かぶかもしれない。けれど「学びを意図したつながり」となると、途端に機会がないことに気づく。全学の授業も基本的には学部ごとに区分されていることが多いため、学部を越えて学びの輪を広げることは思った以上に骨が折れる。企画部会が提供する学習イベントは、こうした状況に改善の道を示すものだろう。実際、今年度の「かんがえるソファ」の運営で、様々な所属の学生が同じ学びの空間を共有して

いる姿を何度も見てきた。

また、人文系の学問は方法論も研究対象も多様であり、「共通の土台のもとに（学問的に）議論する」ことが難しい場合がある。これは、文学部で 4 年間を過ごしての率直な感想である。「この線を越えたら学問的にはトンデモになってしまう」という線引きは確かに存在するのだが、それらの多くは学者の間で身体知化/暗黙知化されており、分野ごとに境界の引き方も違う。だからこそ、分野の差があまり生じないような基本的な思考能力（論理的思考、多角的な視座、抽象のハシゴの上り下り、言葉の定義の確認、隠れた前提の自覚など）を鍛えることが確固たる土台を提供してくれる。現在の企画部会の活動は、こうした力を養えるような機会を創出している。（そして、その質を高めていく試みは、企画部会の活動にとって重要なものであることは間違いない。）

SLA の立場としても、ファシリテーションの経験を積むことができるのは非常に学びになる。SLA の活動経験は、今後私自身が更に学びの機会を捜し求め、また時には自ら創出していく上で大きな支えになってくれるだろう。

このように、企画 SLA は絶対に必要な存在であり、その存在意義は疑いようがない。しかし、その意義を当の企画 SLA 自身が自覚し、言語化し、実践して周囲に示していくことができない限り、企画部会の価値には疑念の影が差してしまう。

このような意識のもとで、企画 SLA として活動してきたこの 1 年、私が自らに課した課題は「企画部会運営に関わる諸概念・課題を言語化する」ことだった。その（幾分未熟な）総決算が本稿である。企画 SLA の活動がより充実したものになること、この記事が微力ながらその助けとなること、そして、将来の企画 SLA がこの文章を読み、私が経験したのと同じ興奮とやるせなさの二律背反を感じる日が来ないことを願ってやまない。

参考文献

足立佳菜(2018)『学習支援ハンドブック―理系チュータリング Tips とチューター育成―』

佐藤智子(2017)「企画発信型学習支援をなぜ『強化』するのか」『学習支援センター(SLA サポート)年次活動報告書―2016 年度―』東北だ学行動教養教育・学習支援機構 17-20.

槙田淳也(2018)「企画部会活動報告―企画 SLA の勘所と SLATips 作成について―」『学習支援センター(SLA サポート)年次活動報告書（2017 年度)』東北大学高度教養教育・学習支援機構 85-86.

6. SLA 卒業プレゼンテーション

2020年度後期セメスター活動報告会
卒業生プレゼン

2021年3月1日

高根 大地

①「学生のやる気を保つべし」

SLAも解けない問題を学生が持ってきたとき、何を目標に対応しますか？　やってはいけないことは?

チューターが向き合うべきなのはその“問題”ではなくあくまで“学生”

学習支援ハンドブックTips.6 P24

希望を残して終える。　学生を問題を解くプロセスに巻き込む

問題を引き受けない　対応前よりやる気をUP　慌てない

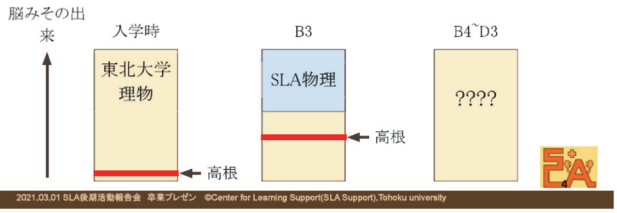
この問題は難しいと“自信を持って”言う。　どこがむずかしいか紐解く

② 異分野交流はSLAの華

- 色んな分野の学問好きたちの集まる場所
- キャリアも色々
  (文系・理系博士課程、アカデミア研究職、メーカー、理物修士から証券会社、博士取得後ベンチャー企業社長...)

堀越さん「高根さん最後に川柳を」

補欠から
自分も育った
ともそだち



2020年度後期セメスター活動報告会

インパクト大な対応

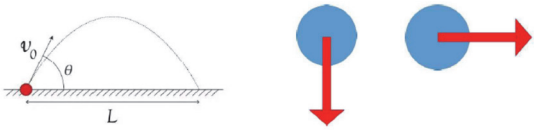
2021年3月1日

赤池 瑞生

①「基礎すぎて」...難しい

飛んでる時の力って？

$F = ma$って何？



②トリッキー過ぎる

まとめ

原因　常識が違う、見えている物が違う

大事なこと　自分の常識を一度捨て去って、
相手や自分を理解しようとすること

2020年度後期セメスター活動報告会

卒業生プレゼン

2020年3月1日

能沢 真由

① つかみのコンサル

- 初めての利用者の場合
  自己紹介などコンサルで緊張を解く
  →その後の対応が円滑になるかも(当社比)

- コンサルは利用者の質問を知るだけでなく、
  学習の背景や授業の様子などを聞くチャンス！
  →学生の現状をることで対応の幅が広がる可能性

② 雑談＝案の宝庫？

- 対応などの主業務の間に交わす、他SLAと会話
  →他愛ないやり取りが新たな企画を生む（かも）

- オンラインは部会ごとのmeetで待機
  →同じシフト間でも交流が持ちづらかった
  But, ブリーフミーティング時は
  堀越さんのクイズが何かのきっかけに？！

2019年度後期セメスター活動報告会

卒業生プレゼン

2021年3月1日

高山翔園

①「共感」

- 【理由・背景】
  共感によって、考えの共有・信頼関係を構築することができ、それがスムーズな対応に繋がるから。

- 【解説】
  共感を示すことで、同じ目線を共有出来るだけでなく、信頼関係を生むことが出来る

②挨拶と雑談を大事に！

- 挨拶と雑談を通して、円滑な人間関係を築こう

- 【理由】
  人間関係が円滑であれば、どんなに大変な活動も助け合いながら切り抜けられるから。

- 【エピソード】
  急な予定変更によってシフトの交替をお願いする際に、普段から慣れ親しんでいたことで助けて貰うことが出来た。

企画部会はどこから来たのか、
企画部会は何者か、
企画部会はどこへ行くのか、

2020年度活動報告会（2021/03/01）
卒業生プレゼン
企画部会　坂本瑞生

SLA加入当初からの戸惑い

企画（かんがえるソファ）をやります！

「やった感」はあっても何を成し遂げたのかが分からない

そもそも、何をもってして「企画の成功」とするのか？

企画部会ってなんだ？

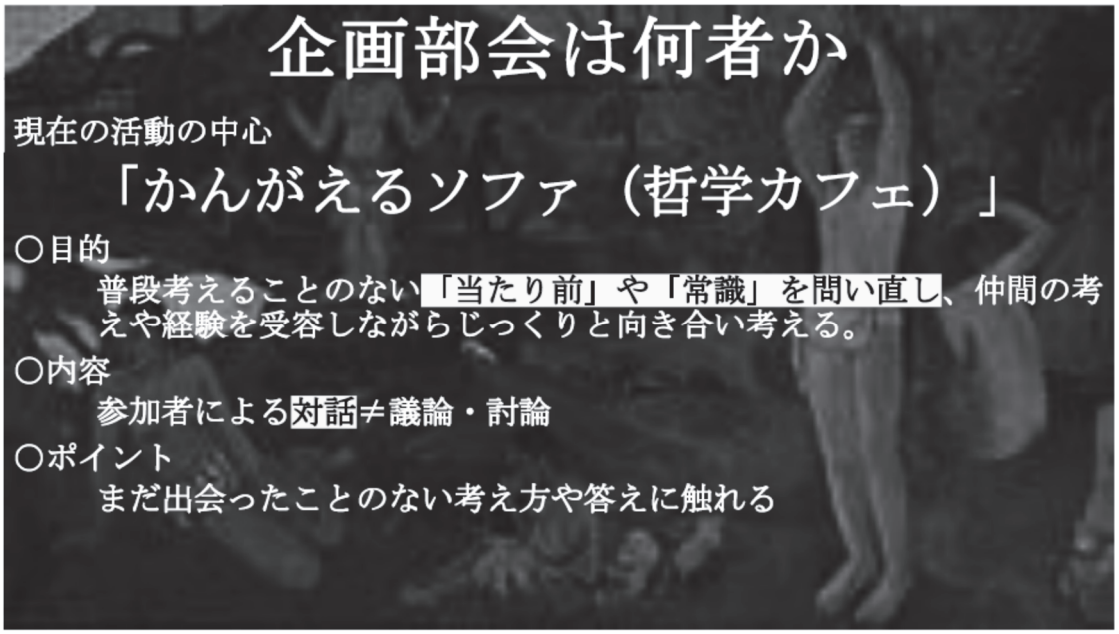
企画部会はどこから来たのか

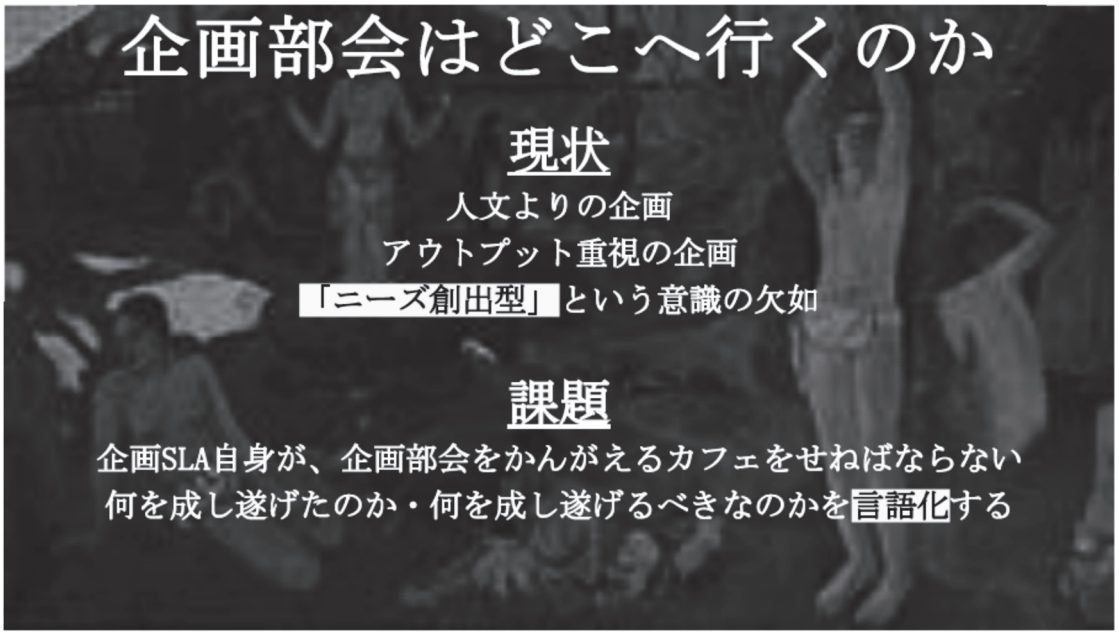
①2016年センター年報（佐藤智子「企画発信型学習支援を何故「強化」するのか」）

1. 授業外・授業以外の学習機会の創出
2. 文系学生支援の拡充
3. 学部を越えた学生間の交流
4. 教養教育の意義の伝達・意識づけ

②2018年発行の『学習支援ハンドブック』

- 「企画発信型支援」は、質問を待つ形ではなく、こちらから学習（支援）の機会を提供する大小さまざまな企画提案型の支援形態で、ニーズ創出型の支援です。」（p. 6）
- 「最も新しい領域は企画担当です。これは、学習イベント等を実施し授業の枠にとらわれない「学びを創る」支援を行うものです。学習イベントは単発的にこれまで実施もしてきましたが、これを専任で担当する SLA を 2016 年 11 月に 採用し、現在、開発にあたっています。」（p. 8）


企画部会は何者か
現在の活動の中心
「かんがえるソファ（哲学カフェ）」
○目的
普段考えることのない「当たり前」や「常識」を問い直し、仲間の考えや経験を受容しながらじっくりと向き合い考える。
○内容
参加者による対話≠議論・討論
○ポイント
まだ出会ったことのない考え方や答えに触れる


企画部会はどこへ行くのか
現状
人文よりの企画
アウトプット重視の企画
「ニーズ創出型」という意識の欠如
課題
企画SLA自身が、企画部会をかんがえるカフェをせねばならない
何を成し遂げたのか・何を成し遂げるべきなのかを言語化する

資料：2020年度発行ポスター

▲1）後期利用案内

▲2）SLA 体験 Week2020

▲3）かんがえるソファ　6 月

▲4）かんがえるソファ　7 月

▲5）かんがえるソファ　10 月

▲6）かんがえるソファ　11 月

▲7）かんがえるソファ　12 月

＝編集後記＝

『学習支援センター（SLA サポート）年次活動報告書』第 7 号を刊行することができましたことを、関係者の皆様にお礼申し上げます。

2020 年度は、新型コロナウィルス感染症拡大により、あらゆる状況・あらゆる場面で変化を迫られる時間を過ごすこととなりました。対面接触を厳しく制限される中で、当センターの学習支援活動においても、オンライン支援の体制整備と質の向上に注力した一年でした。

2020 年は、私たちの日常生活の中にあった「当たり前」が、大きく根底から覆された一年だったのではないでしょうか。2019 年度まで積み上げてきた対面での学習支援のあり方を、前提から問い直す契機になったと言えます。相談窓口を開設し 1 対 1 で丁寧に学生の学習相談に応じていく形を、どのようにオンラインで実現するのか。センター教職員と SLA が共に頭を悩ませ、協働してアイディアを絞り、試行錯誤を重ねながら活動した、挑戦の一年ともなりました。

言うまでもなく、オンラインでの学習支援に初めて取り組んだという状況下で、十分な成果を上げたとは言い難いかもしれません。ですが、日常生活を大きく制約された中でも、当センターの目指す「ともそだち」の理念を見失うことなく、SLA たちそれぞれが主体性とチーム力を発揮しながら、一年間を滞りなく活動できたと自負しています。

2020 年度当初は、感染拡大期を耐え忍ぶ一過的な措置として受け止めていた「オンライン」という手段ですが、予期せぬ成果として、対面では利用できない、あるいは利用しづらい学生からのアクセスが増え、利用者の裾野を広げることができたという面もありました。感染拡大期における一時的な措置ではなく、オンラインを活用した学習支援が 1 つのオプションとして定着していくという確信を得たところでもあります。今後は、学生の状況や目的に応じてより適切な方法を選択し、あるいは組み合わせながら、幅広い層に多様な学習支援を届けていけるような活動展開の可能性も見えてきました。

末筆となりましたが、2020 年度も、学内外の多くの皆様に支えられ、かつて経験した事のないほどに苦難と不安の蔓延した状況の中でも、SLA サポート活動を進めることができました。最後に、前例もなく何が正解かも分からない環境にあって、共にセンターの活動を支えてくれた SLA の皆さんに、感謝と労いの言葉を伝えたいと思います。本当にありがとうございました。

（佐藤　智子）

学習支援センター（SLA サポート）年次活動報告書　－2020 年度－
Annual Report 2020 / Center for Learning Support (SLA Support Office)

2022 年 3 月 25 日発行
東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター（SLA サポート）
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41 番地 マルチメディア教育研究棟 1F
website : http://sla.cls.ihe.tohoku.ac.jp/

印刷 北日本印刷株式会社

※SLA 学生の各種作成物の情報は、学生個人の見解によるものも含まれることをあらかじめご了承ください。
※本冊子掲載の写真データの無断使用を固く禁じます。

Together we learn,
Together we grow,
"TOMOSODACHI"!

with Student Learning Adviser